

冬仏壇と夏仏壇（忠谷久五郎家）

ところで、橋立集落が北前船で栄えたところは各家で競って豪華な仏壇を備えていました。そのためかつては「仏壇は一番最後に入って、一番最初に出て行く」といわれました。仏壇はとても高額だったので、各家では最もはぶりのよいときに購入し、高額なるがゆえに家運が傾いたときには、最もまとまった資金源として真っ先に売られたからでしょう。

集落の中心部にある真宗大谷派橋立支院は、元は因随寺といひ蓮如の遺戒を守る寺院でした。しかし因随寺は、明治五年の大火で焼失してしまいました。その後、住職芳原大住が再建にあたりますが遅々として進まず、明治一年、住職は寺から去り、無住の寺となりました。その後、因随寺が願成寺（大聖寺城下）の下寺であったことから、願成寺説教所として復興することも考えられましたが、最終的には、明治十二年、信徒の協議に基づき、真宗大谷派福井別院の支院となりました。また、設立に際しては、士分格をもった西出家や増田家をはじめ、信徒である橋立の北前船主が多く寄進を行っています。内陣・外陣の欄間彫刻に一〇名の橋立の北前船主が寄進者として記され、本堂が橋立の有力船主の寄進によって建立されたことがあらためて確認できます。この橋立支院は、現在でも住職が不在ですが、先祖の意思を受け継いだ地元橋立集落の人々によって、今も大切に維持され

ています。

このように、船絵馬や船仏壇など北前船にちなんだ慣習、住職が不在でも本堂を建立した船主たちの財力と信仰心、危険と隣り合わせの航海に挑んだ挑戦的精神は、地元では「北前魂」と呼ばれている大切なものです。

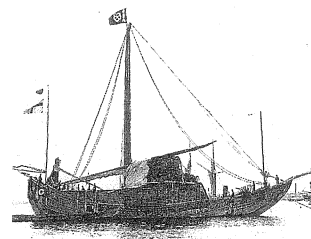
加賀橋立は、まだ重伝建地区として始まったばかりで、建造物の修理もこれからですが、町並みの保存とともに、北前船主たちの「北前魂」も地元の人々によって後世に継承されていくことを願っています。

（加賀市建設部整備課景観文化室主任 澤出幸雄）

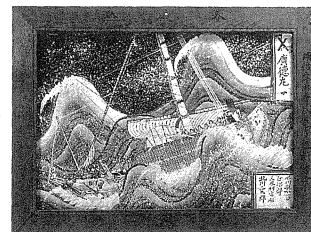


橋立北前船主の寄進により建立した橋立支院

いてあり、現在でもこうした例が四件残っています。その大きいほうを「冬仏壇」、小さいほうを「夏仏壇」と呼んでいます。これは、「冬仏壇」は当主が航海から戻り家に居る冬場や報恩講や法事など重要なときに使用し、「夏仏壇」は当主が航海で家を留守にする春から秋にかけて女性や子どもが毎日のお勤め使用したことからこう呼ばれています。こうした仏壇の使い分けは、北前船主の暮らしにちなんだものであり、橋立集落における特徴といえます。



北前船で使用された舟才船「幸賞丸」



船絵馬「広徳丸海難図」（御木神社奉納）

水を防ぐ甲板をもつていなかったことが第一の原因でした。当時の和船は、荷物を船底から表まで高く積み上げました。これを「山を取る」といい、水ぬれを防ぐため、「こも」や「とま」をかぶせていました。この形は荷物の積み下ろしには便利ですが、大波を受けた

ときに海水が上から入りやすい欠点がありました。そのため海上で台風などにあうと大変です。まず急いで帆をおろし帆柱を倒します。ときにはマサカリで帆柱そのものを根本から切り倒すこともありましたが、そして錨をすべしておろしあらゆる綱をたらし、できるだけ船足を重くし船の流れを防ぐ、それ以上は何も手だてはありません。市内の御木神社に奉納された広徳丸の海難図船絵馬には、帆をおろし、船乗りたちが神仏に手を合わせ、波が鎮まるようお祈りをする様子が描かれています。そのため、船には船仏壇という小型の仏壇まで積んでいました。

もともと加賀の地は中世の一向一揆に代表されるように、浄土真宗のさかんな信仰心のあつた地域です。橋立集落も住民の大半が浄土真宗大谷派の門徒で占められています。こうした土地柄ゆえ、仏壇も信仰のよりどころとして重要視されていました。

船主の邸宅では、仏壇を大小二基並べて置

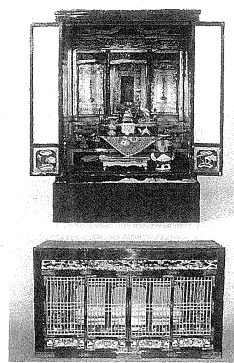
石川県加賀市

せんしゆ 船主集落における神仏信仰

加賀橋立は石川県の南西端、加賀市の沿岸部に位置し、近世から近代にかけて大阪から瀬戸内海や日本海の港に寄港し、交易を行いながら北海道まで航海した「北前船」の船主たちのふるさととして栄えました。最盛期には船主三四名や船頭八名など北前船にかかわる人々が居住し、集落には船主や船頭の豪壮な家屋や特色ある町並みが今も残っており、平成十七年二月二十七日に国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されました。

橋立に限らず、北前船ゆかりの地では、船主や船乗りが航海の安全祈願や無事帰郷できたことを感謝して、船の絵が描かれた絵馬を奉納する慣習がありました。現在も橋立集落の出水神社には奉納された絵馬が一七枚残されています。

このように、船乗りたちが神仏に対してあつた信仰心をもつていた一番の理由は、航海での海難が多かったからだといわれています。それは、和船（舟才船）が現代の船と違って、浸

船仏壇
（所蔵：加賀市北前船の里資料館）



塩田津中町東側の景観：西岡家住宅（手前）と杉光陶器店（奥）

「町づくりは人づくり」といわれるように、塩田津の町並み保存と将来の後継者育成につながるという信じております。

平成一七年（一九二七）年、重要伝統的建造物群保存地区への選定というかたちで結実いたしました。時を同じくして本年（一九九一）年には塩田町と嬉野町が合併して「嬉野市」が

誕生しました。今後、この保存地区が嬉野市とともにどのように成長していくのか、責任の大きさを感ずる毎日ですが、本物の「文化財を活かした町づくり」を目指し、これまで同様、各々が力を合わせて、先人が残してくれた「塩田津らしさ」という文化遺産をこれからの子どもたちへのよりよい贈り物として伝えていかなければと思っております。最後になりましたが、塩田津の歴史的町並みを散策し、嬉野の湯で心と体をいやす、ひとときの安らぎを感じることができるといいでしょう。ぜひ一度、嬉野市においでいただき、あなたの町づくりへの提言をお聞かせください。

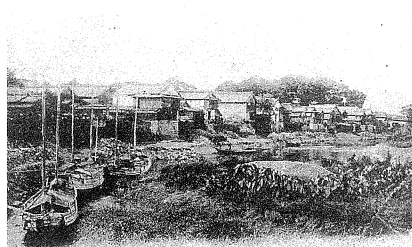
（嬉野市教育委員会社会教育課文化財係
峯崎幸清・小野将史）

帳の整理をされるなど、限られた時間を惜しみながら作業されていた大学の研究室の皆様へ深く感謝を申し上げます。

塩田津の歴史的建造物は、何度も床上浸水の被害を受けてきました。日々、これらの建造物が幾多の風雪に耐えながら生き続けてきたことを目の当たりにするとともに、受け継ぐことの責務の大きさを痛感しているところです。塩田津の町並みが残されてきたのは、先人たちの努力と忍耐の賜物であり、今を生きている私たちが見習うべき教訓が随所にみられる

生きた教材といえましょう。

昭和四九年に国の重要文化財に指定された西岡家住宅と平成一〇年に国の登録有形文化財となった杉光陶器店が軒を連ねる中町を核とし、江戸後期に建設された「居蔵家」と呼ばれる町家が重厚な景観を形成しており、これに塩田石工によって造られた石垣や仁王像・恵比寿像、樹木などが加わって良好な歴史的風致を構成しています。



川港の景観【大正時代】



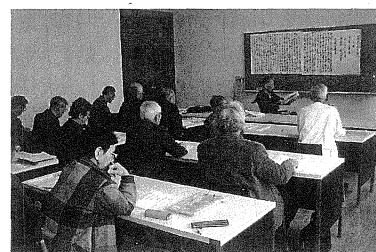
旧長崎街道（右側）沿いの景観【大正時代】

佐賀県嬉野市塩田町

先人が残してくれた「塩田津らしさ」

嬉野市塩田町は、佐賀県の南西部に位置します。「塩田」は、奈良時代に編纂された「肥前国風土記」にみえるのが最初で、「藤津郡」の項に「潮高満川」に由来する「塩田川」として記されています。有明海の潮が満ちる意とされ、塩田津は有明海から遡流する塩田川の川港と長崎街道が育んだ商家町として、藩政期には運池藩の西目統治の拠点として栄えました。

塩田津に関する私どもの知識は、その大半が杉光雄さんから学びました。杉光さんは、大正一五年生まれの八〇歳、身の丈六尺二寸、足が二文もある「町並み研究会」の会長で、登録有形文化財「杉光陶器店」の当主です。重要文化財西岡家住宅をはじめ、塩田津の今昔を来訪者に熱く語ら



古文書研究会



西岡家住宅裏庭での餅つき

れる塩田津の生き字引です。ときには、ご自宅の座敷までも見学を許され、座をくずすの塩田談議が始まります。伝統的建造物群保存対策調査の導入についても早くからご指摘をいただき、制度の導入や保存物件の同意の際には、私たちとともに一軒一軒説明に赴いては、対象地区の意識をまとめられた功労者の一人です。

町並み保存に係る活動については、平成二年の「塩田塾」を母体とする「塩田職人組合」や平成一二年に発足した「町並み研究会」があります。

職人博覧会を開催し、塩田の伝統産業であった「鍋野和紙」の復興に努めるなど、地元住民が主体となった活動が展開しています。また、「古文書研究会」（講師・松尾喬氏）では、塩田津御蔵馬場北側に家を構える塩田の米商人、江口平兵衛が天保二年（一八四一）～安政五年（一八五八）の一八八間に及ぶ塩田の日常生活を事細かに書き記した文書「天相日記」を長年にわたって地道に解読し、「居蔵家」と呼ばれる塩田津の居蔵造町家の来歴を明らかにする成果を挙げるなど、町並みの歴史的・文化的価値を高める生涯学習活動もさかんに行われています。

このような地道な活動の集約と地元住民の理解を得たことにより、平成一四～一五年度に伝統的建造物群保存対策調査が行われました。地元住民の協力和大学の先生方の熱心な調査により、伝統家屋の大半を調査することができ、今まで気づけなかった塩田津の履歴を明らかにしていただきました。また、地元の県立塩田工業高等学校の生徒さんにも、伝統家屋の図面作成を行っていただきました。調査は、夏場の暑い屋根裏での実測などたいへん過酷なもので、夜は睡魔に襲われながら野

また、加悦では江戸時代中期から天満神社の祭礼に伴う屋台行事が始まり、加悦の上乃町など五地区ではそれぞれ歌舞伎や狂言を上演する豪華な芸屋台、御神体を乗せた山屋台、お囃子や神楽などがさかんに上演されました。長く



天満神社祭礼神輿練り歩き

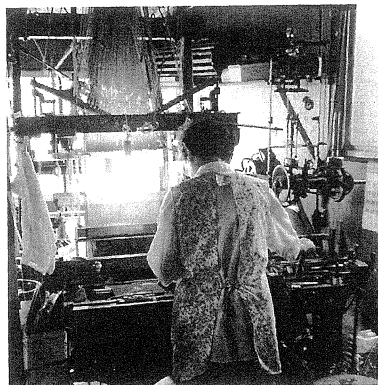
「誇り」がぜひとも必要になってきます。自分たちが住む地域を「誇り」に思えないと、町並みの保存はなかなか難しいのではないかと思います。それから、町並み地区をもっと外の人たちに知ってもらうという趣旨で、「ちりめん街道まるごとミュージアム」というイベントが平成一〇年から開催されています。毎年、秋の一日、街道筋を会場にして大勢の人々にぎわいをみせています。

また、加悦では江戸時代中期から天満神社の祭礼に伴う屋台行事が始まり、加悦の上乃町など五地区ではそれぞれ歌舞伎や狂言を上演する豪華な芸屋台、御神体を乗せた山屋台、お囃子や神楽などがさかんに上演されました。長く

する「街道塾」が頻繁に開催され、住民みずから地域の歴史、特に江戸時代から昭和初期までの地域社会の移り変わりを学習してきました。その過程で住民にも町並みの大切さが次第に認識されるようになり、街道塾では、「わしはここに住むことを誇りに思う」と発言される方も出るようになりました。

厳しい冬もようやく終わりを告げ、田畑に水が引かれる四月下旬、天満神社の二二〇段に及ぶ石階段を重厚な神輿が人々に担がれて降りてきます。今日、芸屋台で歌舞伎や狂言は上演されませんが、神輿は地区内を練り歩き、神楽の笛や太鼓の音が街道筋に響き渡り、人々は春の訪れを実感します。

そして、人々が心待ちにしている加悦谷祭が終わる、五月に入るとあちこちで田植えが始まるのです。



丹後縮緬を織る

さらに、「ちりめん街道」と呼ばれるようにかつては街道筋で縮緬を織る機音が響き渡っていましたが、産業構造の変化で機台の数も激減しています。ガチャガチャという機音が響いてのちりめん街道なので、なんとかしてこの機音を存続させることができないのか、知恵をばっかっています。

このように、与謝野町加悦地区では伝統的建造物の保存から始まって、単に古い建物の保存だけでなく、地域連帯感の醸成、祭りの存続、水路の浄化、機音の継続、後継者、空家などさまざまな問題に人々の関心が広まってきており、今後はそれらの課題を一つひとつ住民みずから解決していくことが求められています。

(与謝野町教育委員会教育推進課主幹 佐藤晃一)

京都府与謝野町加悦

伝統的建造物群保存地区を見つめる住民のまなざし

京都府与謝野町加悦は、京都府北部丹後半島のつけ根にあり、その南には丹後と丹波を画する大江山連峰がそびえています。加悦は古代より丹後と近畿中央部を結ぶ交通の要衝として栄え、その中心にはかつて「京街道」と呼ばれ、丹後と京都を結んだ街道が走っています。

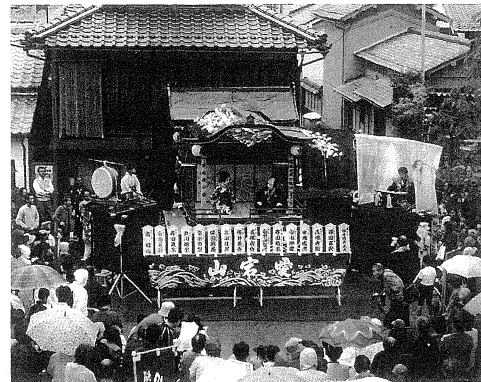
い静かな道となり、いつしか「ちりめん街道」と呼ばれるようになりました。さて、加悦は中世には武士の袴地などに使用された「丹後精好」と呼ばれる絹織物の生産地として、また、江戸時代中期からは高級絹織物である「丹後縮緬」の主産地となりました。今日、保存地区内には江戸時代後期から昭和初期にかけて建てられた縮緬生糸商家・



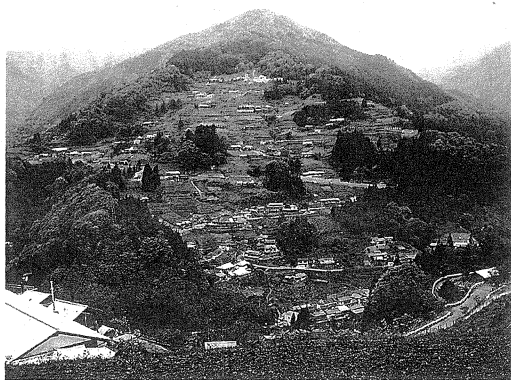
漆喰の白壁に彩られたちりめん格子や虫籠(むしご)窓のある加悦保存地区の町並み：花組地区(上)と中市地区

製織工場・職工宿舎、縮緬産業を支えた銀行、郵便局、旅館、酒蔵、役場などの建物が数多く残されています。さらに、地区の中心にある天神山には天満神社が鎮座し、その山麓には浄土宗・臨済宗・日蓮宗の各寺院が集中して寺町を形成しています。このように、加悦保存地区は近世以来丹後縮緬とともに発展してきました。

この町並みが見直されたのは、昭和六二年、京都工芸繊維大学による町並み現状調査が実施されてからで、実際に住民が町並みの大切さを認識し始めたのは、平成一〇年ごろからです。一三年には地域住民を中心に「ちりめん街道を守り育てる会」が組織化され、統一デザイン暖簾づくり、ちりめん街道上着・法被の製作、「ちりめん街道まるごとミュージアム」イベントなど多彩な取組が始まりました。街道上着は女性向き、法被は男性用でイベントや先進地視察に行く際に着用しており、暖簾とともに地域住民により一体感を高めることがねらいです。さらに、地域の歴史を学習



「ちりめん街道まるごとミュージアム」で子ども歌舞伎を上演



保存地区全景

的にみても価値が高いということで、平成七年二月二七日に、「重要伝統的建造物群保存地区」に選定をされたところです。

三好市東祖谷（旧東祖谷山村）は、日本三大秘境の一つに数えられる山深い村です。日本全体が高度成長にわき、自然開発と都市化を続ける中で、交通の難所とされた本村の開発はまったく進んではいないといえますが、そのことが、逆に他の多くの村々が失ってしまった豊かな自然や独特の生活文化、住民たちの絆というかけがえない財産を残す結果につながったと考えます。人々が本當の豊か

さを求めて、地方の個性が見直されるようになった今日、未開発の自然ややすらぎを求めて東祖谷を訪れる人が増えています。さらに、平家伝説を伝える村は数多いところですが、その中でも祖谷は平家落人の里として全国的にもよく知られています。東祖谷には、平家子孫である阿佐家、平家の赤旗、国盛手植えの鈴杉など、平家一族にまつわる数々の伝説が、多くの遺跡と遺品とともに山里のあちこちに残されています。

安徳天皇の御火葬場がある栗枝渡八幡神社は、全国に四つ認められている安徳天皇の御陵の一つでもあります。

以上のことは東祖谷に伝わる伝説であり、史実は明らかではありません。しかし、これらの伝説は長い歴史の中で語り継がれ、村人たちによって固く信じられてきました。それらは村人たちの誇りであり、心の支えでもあります。

平家落人がこの地に逃れて土着したことは間違いがなく、日照時間が短く冬の訪れも早いこの東祖谷で、焼畑によりヒエ、アワ、ソバやミツマタなどを作り、自給自足の生活を行っていたのです。また、敵の追っ手から逃れるため、自生するシラクチカズラで造られたかずら橋があり、今でも奥祖谷に二重のかずら橋が残されて、秘境祖谷の観光名所となっています。

そうした歴史と文化があつて、重要伝統的建造物群保存地区が選定されたと確信しています。地元保存会としても、自分たちの宝物を後世に残そうと自主防災組織の設立や農耕、その他技術の伝承をすべく活動しており、今後の自主活動に期待するとともに、行政としての支援等課題についても十分検討していきたいと考えています。

（三好市教育委員会東祖谷分室長 谷口 晃）

徳島県三好市

秘境と平家落人伝説がのこる 伝建地区

徳島県三好市は、平成一八年三月一日に旧三好郡の三野町、井川町、池田町、山城町、西祖谷山村、東祖谷山村の六か町村が合併して誕生したばかりです。

徳島県の西部で、四国のほぼ中央に位置し大歩危峠や黒沢湿原、紅葉の名所・竜ヶ岳、四国第二の高峰・剣山といった豊かな自然がたくさん残っています。



保存地区建造物群配置



保存地区屋敷地形成の石垣



国指定重要文化財「旧小采家住宅」

なかでも、東祖谷は三好市の南部に位置し、

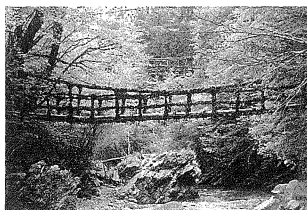
寒峰、塔丸、天狗塚、三嶺、剣山といった一六〇m〜一九〇m級の高山に囲まれ、その山腹および川沿いに集落が散在しています。山林が九五％、耕地はわずか〇・六％で急峻な山々に囲まれ剣山国定公園が広がり、平成七年度には「村中公園化憲章条例」、平成一六年度には「伝統的建造物群保存地区保存条例」

を施行し、自然環境と景観の保全に努めているところです。

伝統的建造物群保存地区の落合地区は、険しい東祖谷山間の祖谷川と落合川との合流地点より山の急斜面に沿って広がる集落で、急斜面いっぱいには畑地が広がり、その中に民家がはりつくようにつくられており、集落中央にある神社周辺の鎮守の森が景観を特徴づけています。

保存地区は、東西約七五〇m、南北約八五〇m、面積約三・一haの範囲であり、地区内の標高差は三九〇mもあり、屋敷地や耕作地は、石垣によってつくられ細長い形状の平坦地に設けられています。屋敷地には、主屋と納屋、隠居屋などが谷側を正面にして並んで建ち、主屋は平入りで、台所兼居間であるウチと客間であるオモテの二室を左右に並べる例やウチとオモテの間にナカノマとネマを前後に置く例など、山村民家に見られる特徴的な間取りとなっています。当初、屋根は茅葺きで間口部以外はいずれも土壁であり、その外側をひしやぎ竹（割り竹）によって覆い、独特の仕上げとなっていました。

東祖谷山村落合伝統的建造物群保存地区は、山の中腹から麓にかけて立地する山村集落であり、江戸中期・後期に建てられた主屋等が多く残され、石垣など周辺環境とともに一体となった歴史的風致をよく伝えており、全国

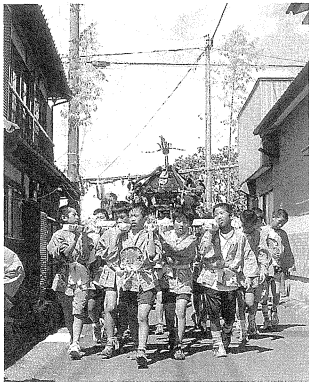


奥祖谷の二重かずら橋



市指定史跡「安徳天皇御火葬場」

地域文化伝承と発想の転換
毎年七月一三―一五日の期間、日本武尊をまつた松岡神社の「祇園祭り」が行われ、獅子舞や面浮立などが盛大に披露され、保存地区とその一帯を夕方から夜遅くまでお神輿とお供がにぎやかに練り歩きます。一三日の夜は子どもたちが地区ごとのグループに分かれた提灯行列もあり、この期間はたくさんの観客が祭りムードに花を添えます。



祇園祭りで子ども神輿の練り歩き

この地区は、一大観光地のにぎやかさは程遠いですが、これから先も住民の皆さんと行政が力を合わせ、選定をきっかけにこの制度をうまく活用し、町並み景観だけでなく人材（人材）づくりも合わせて取り組み、その結果として、この町並みを将来にわたって守っていく人々が増えていくことを願います。

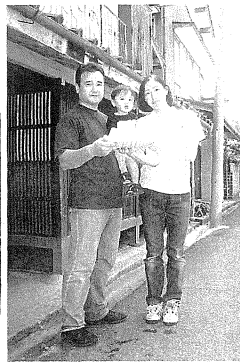
（鹿島市建設環境部まちなみ活性課係長 岩下善孝）

腕前でもあります。多忙なご主人を陰ながら支える奥さんは、もうすぐ一児の母になる明るく元気な女性です。伝統文化を愛し、昔ながらの手作り豆腐をなじみのお客さんへお届けできる喜びで、夫婦の顔にも自然と笑顔がこぼれます。



峰松マス子さんが長年の経験で焼くうなぎの味は格別

若夫婦の技術継承は町並み保存にたいへん貴重



子舞や面浮立などが盛大に披露され、保存地区とその一帯を夕方から夜遅くまでお神輿とお供がにぎやかに練り歩きます。一三日の夜は子どもたちが地区ごとのグループに分かれた提灯行列もあり、この期間はたくさんの観客が祭りムードに花を添えます。

今年から「観る！ 歩く！ 食す！ 肥前

重要伝統的建造物群保存地区 選定による期待



肥前浜宿ウォークで町並み解説を行う地元ボランティアガイド

佐賀県鹿島市

新選定 茅葺町家を今に残す 佐賀鍋島藩の港町

かやぶきまちや

歴史がさかのぼる町並み空間

「鹿島市浜津町浜金屋町地区」は佐賀県南西部に位置し、日本一の干満差をもつ有明海に流れ込む浜川と福岡・長崎間を結ぶ国道二



河港に面した小路と水路沿いに建ち並ぶ茅葺の町並み

〇七号線が隣接しています。

長崎街道の脇街道「多良海道」が町並みの中心を通り、有明海の最深部に位置する港をもつ立地から、近世には鹿島藩の港町として鹿島藩領内の商工業を担ういちばんの中心地でありました。その好条件を利用し、陸と海の交通の要所として栄えました。

当時、ここには商人や船乗り、鍛冶屋等が住み発展し、多良海道を基軸に小路と水路が縦横に走り、河港の在郷町としての地割をよく残しながら茅葺や棧瓦葺の町家が建ち並び、特色ある歴史的景観を今日によく伝えています。



真水と海水が合流する河港の景観

大隈重信を育てた儒者、草場佩川が浜

「うなぎの焼けよっぱってん、肝はおまけすっけん一匹どきやんねー。――うなぎが焼けているけど、肝を付けてやるから一匹どうですか――の意味です。浜川沿いの保存地区入口に家族で魚屋を長年営む峰松マス子さんの気さくで元気な呼び声と、店の窓を開けて毎日焼かれるうなぎの香ばしいにおいと煙につられ、観光客が散策の途中、一口サイズに切ったうなぎを買ってはおぼりながら、また散策し続ける姿をよく見かけます。のんびりとした雰

囲気の中に、食を通じて地元の人と来訪者との交流を感じ取れるひとときです。

多良海道の中央に位置する店で豆腐作りに励む若い峰松さん夫婦は、早朝から忙しく働き始めます。この町にとっては頼もしい存在であり、ご主人は生まれ育った故郷で一〇〇年以上続く家業を継ぐため帰郷され、奥さんは大阪出身です。また、ご主人は特技を生かして、青少年育成のため剣道を指導するうえ、居合も有段で江戸時代から続く無外流免許の

さらに大きな伝統行事として「宇陀の初市」があり、地元では「えべっさん」と呼ばれ親しまれています。安永九年（一七八〇）の「市場一件諸書物」によると、宇陀松山は毎月三のつく日は上中・上で、八のつく日は下中・下出口で市が立ち、このほか年二回、節季市が開催されていたとあります。この名残が「宇陀の初市」で、毎年二月八日に商売繁盛を願う郡内の人々が吉兆を求めてえびす神社に集まり、その参道に当たる下中・下出口界隈に露店が並びます。吉兆には番号が入った二重福引券がついており、買ったその場で最初の抽選、その日の夜に当選番号を発表して配当をしています。かつては、初市の日仕事も学校も午前中で終わり、だれもが松山へ繰り出した時期があったそうです。

この宇陀の初市は、えびす神社が所在する大字で運営していましたが、住民の高齢化に伴い、存続が危ぶまれた時期がありました。幸いにも地元からの要請を受けた商工会青年部が今年から初市の運営を引き継ぐことになり、伝統的な行事の中に青年部の発想を盛り込んだ事業を展開した結果、再び初市に活気が戻ってきました。



今年から始まった福娘のお練り



本町通りから宇陀松山城跡を望む

みな行事だった」と語っており、『楽しかった宇陀松山の再現』のカギとして今も残る伝統行事やとどえた行事に着目し、今後のまちづくりの在り方を模索しておられます。

一方で、地域の若手を中心とした歴史的町並みを活用する取組も始まっています。「松山夢街道まちなみライトアップ」です。夜の町並みを魅力的に演出し、地元住民や来訪者に見てもらおうと、平成一四年から毎年行われているイベントです。毎年、一五軒前後の伝統的な町家に光が当てられ、最終日には地域住民による模擬店やコンサート等にてぎわいます。

例年は八月下旬に実施されます。

宇陀松山の重要伝統的建造物群保存地区選定、宇陀松山城の史跡指定、今



まちなみライトアップ（黒川本家）

年は宇陀松山にとって大きな出来事が続きました。このことを記念して、平成一八年一〇月一六日（土）に記念講演「宇陀松山―城と町―」を開催し、ライトアップも記念講演にあわせて実施されることになりました。

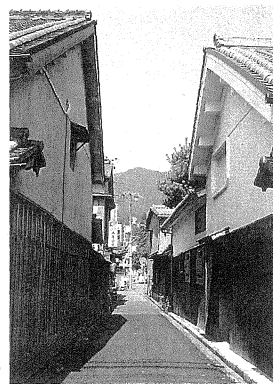
城と町が一体となった歴史的環境は、全国的にみても希有な存在です。その価値を読み取りながら、地元と行政が一九九〇年になって魅力あふれる環境を継承していきたいと思っています。

（宇陀市教育委員会松山地区まちづくりセンター主査 森本陽子）

商家町の伝統行事と 宇陀松山の現在

奈良県宇陀市大字陀区は、奈良盆地の東にそびえる宇陀山地の南西部に位置し、歴史的町並みは、山々の間をぬって流れる宇陀川と古城山（宇陀松山城跡）の間に南北に細長く展開しています。南北朝時代から戦国時代にかけて秋山氏が築いた城とふもとの集落が町並みの始まりで、近世初頭に豊臣家臣が城の改修と城下町の拡大整備を行ったときの町割が現在の町の骨格になっています。

元和元年（一六一五）に城は壊されましたが、城下町は江戸時代中期から天領になり、宇



東西通りのヴィスタ（目標物）：西山岳

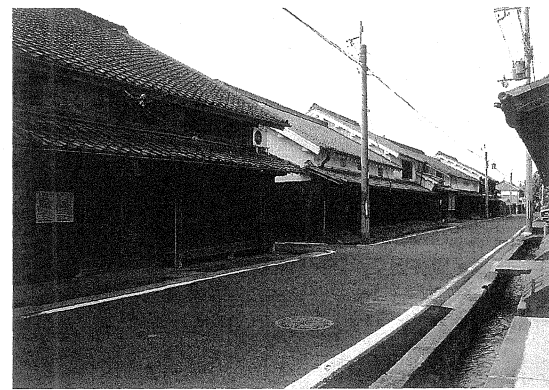
陀千軒・松山千軒と呼ばれるほどの活況を呈していました。また、明治時代には宇陀郡役所や裁判所が置かれ、宇陀郡の中心地としてにぎわいました。

古城山と西山岳を景観の中に巧みに取り込んだ町割りの上には、近世・昭和前期までに建てられた町家・土蔵・寺社等が数多く残り、宇陀川から町並みの中へと水を引き込む水路とあいまって独特な景観を形成しています。これらの価値が認められ、宇陀市松山は平成一八年七月五日に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。

商家町として栄えた宇陀松山には一八の大字があり、各大字に伊勢講・愛宕講・地藏盆等、さまざまな伝統的風習が残っています。中でも「寒施行」という稲荷信仰は興味深く、「カンセギョウ」またはなまて「センギョ」と呼びます。小寒から大寒の間に大字単位で実施する行事で、午後から準備を始め、日没後に古城山周辺ほか、一〇―一五前後の稲荷

社に小豆のおにぎり等を供えて回ります。

参加者は縦一列に並び「せんぎや、せんぎや」「お稲荷さんのせんぎや」の掛け声とともに町中や山道を練り歩き、社にお供えを置き、すべて回り終えた後に集会所等に戻り料理と酒を頂きます。料理はきつねうどんや鯖飯など大字により異なり、開催する時期や参拝する神社も若干異なります。寒施行は町場にある風習で周辺部にはなく、この行事を継承する人々の間では「山に最も食べ物が無い時期に、町の人が動物たちに施しを与え、町場で悪さをさせぬために始めたのでは」といわれています。



前川（水路）と町家群



街並み

世から近世にかけての赤岩の一端を知ることができま
す。
特に湯本家の建物は、塗り家造りと称して、赤土を厚く塗り上げた防火造りのもので、広々とした地下室を備えていま

す。また、群馬県では珍しい妻入りで、二階への昇降は階段ではなく、四間近い長さの傾斜した廊下にするなど、独特の造りになっています。二階部分までは築後約二〇〇年が経過しており、その後養蚕の拡大のため三階を増築し約一〇〇年が経過しています。二階には、「長英の間」と呼ばれる一室があり、ここは弘化二年（一八四五）火災によって獄舎を逃れた高野長英を一時かくまったといわれる部屋で、往時のまま保存されています。
このほかにも、湯本家では江戸初期から明治まで九代にわたり医業を行っており、明治の文豪、幸田露伴も愛飲したマムシ酒の「月桂酒」や、河童より伝授されたとする「命宝散」などの家伝薬がありました。
赤岩地区では、明治以降、養蚕がさかになるのに伴い、住宅が徐々に養蚕に適したものに建て替えられ、現在の集落景観がかたちづくられるに至ったと考えられます。
養蚕は昭和三〇年代ごろまで赤岩地区のほとんどの家で行われ、昭和三十七年に稚蚕飼育所（ドムロ）が造られ、飼育の難しかった稚蚕を、指導員のもとで共同飼育するようになりました。
昭和三〇年代以降徐々に、養蚕に代わって農家の現金収入源となったのがこんにやく芋栽培でした。こんにやく芋の栽培には、冬期間に芋を掘り出して保温する場所が必要であ

り、養蚕農家の二階の蚕室が保温場所として適していました。赤岩地区では現在でも数件の農家で、二階の蚕室を保管場所として利用したこんにやく芋栽培が続いています。
赤岩地区では毎年春と秋の二回、赤岩神社の祭典が行われています。春の祭典では、以前より雅楽や小学生の四名の女子が巫女の装いで行う「乙女の舞」が奉納されました。しかし、雅楽は指導者が赤岩からいなくなったことにより休止され、乙女の舞だけが続けられてきましたが、近年、子どもの減少によりこれも休止されていました。そこで、二年ほど前から地元有志により雅楽が復活され、伝建地区としての歴史的風致とともに、伝統文化の灯を守っていく機運が高まっています。
赤岩地区は伝統的建造物群保存地区としては産産をあげたばかりであり、まだまだ期待に添えない部分もありますが、六合村全体の風景・自然・空気・歴史・文化・触れ合いなど、たくさんの魅力ある村ですので、ぜひお出かけください。
（六合村教育委員会事務局教育グループ係長 山本伸二）

敷地は段丘の二段目を南北に走る道路に面して形成され、集落の背後（東側）には高間山により形成された山々が連なり、崖が切り立った独特の山間風景をつくりだしています。
赤岩地区では旧石器時代の土器片や石器などが出土しており、隣接する広池地区では、縄文時代中期後半のたて穴式住居が発掘されていることから、このころから人々の居住があったと認められます。
古代から中世における赤岩の歴史は明らかではありませんが、赤岩は三原荘に属していたことが知られています。また、現在赤岩地区に居住する湯本家、関家の歴史は古く、中世までさかのぼるとされ、両家の歴史から中

世から近世にかけての赤岩の一端を知ることができま
す。
特に湯本家の建物は、塗り家造りと称して、赤土を厚く塗り上げた防火造りのもので、広々とした地下室を備えていま

り、養蚕農家の二階の蚕室が保温場所として適していました。赤岩地区では現在でも数件の農家で、二階の蚕室を保管場所として利用したこんにやく芋栽培が続いています。
赤岩地区では毎年春と秋の二回、赤岩神社の祭典が行われています。春の祭典では、以前より雅楽や小学生の四名の女子が巫女の装いで行う「乙女の舞」が奉納されました。しかし、雅楽は指導者が赤岩からいなくなったことにより休止され、乙女の舞だけが続けられてきましたが、近年、子どもの減少によりこれも休止されていました。そこで、二年ほど前から地元有志により雅楽が復活され、伝建地区としての歴史的風致とともに、伝統文化の灯を守っていく機運が高まっています。
赤岩地区は伝統的建造物群保存地区としては産産をあげたばかりであり、まだまだ期待に添えない部分もありますが、六合村全体の風景・自然・空気・歴史・文化・触れ合いなど、たくさんの魅力ある村ですので、ぜひお出かけください。
（六合村教育委員会事務局教育グループ係長 山本伸二）

群馬県六合村赤岩

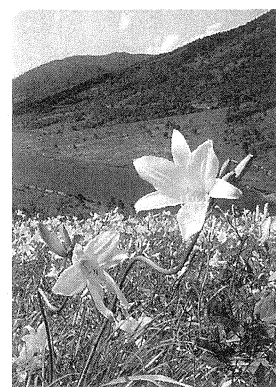
農山村の伝統と取組



六合村全景

六合村は群馬県北西部三國山脈の南麓に位置し、北は長野県・新潟県に接しており、村の総面積は二〇二・八一km²、標高は六〇〇m

から一三〇〇mに及ぶ急峻な山間地域であり、県境の白砂山系を源とする白砂川が村の中央部を北から南に流れています。
県境近くには、昭和三〇年に発電用として日本で初めてのロックフィルダムが建設され、湖となった野反湖があります。野反湖は標高一五〇〇mの高地で、毎年五月中旬ごろまでは残雪があり、初夏から初秋にかけ湖の周りには、シラネアオイやコマクサ、レンゲツツジやノゾリキスゲ、マツムシソウやヤナギランなど色鮮やかな草花が咲き乱れ、二〇〇〇m級の



キスゲ

から一三〇〇mに及ぶ急峻な山間地域であり、県境の白砂山系を源とする白砂川が村の中央部を北から南に流れています。
県境近くには、昭和三〇年に発電用として日本で初めてのロックフィルダムが建設され、湖となった野反湖があります。野反湖は標高一五〇〇mの高地で、毎年五月中旬ごろまでは残雪があり、初夏から初秋にかけ湖の周りには、シラネアオイやコマクサ、レンゲツツジやノゾリキスゲ、マツムシソウやヤナギランなど色鮮やかな草花が咲き乱れ、二〇〇〇m級の

大正時代以前、小雨地区には「冬住み」の制度がありました。当時、草津で旅館業を営んでいた人々は、一月になるとお客も途絶え、豪雪で住むことのできない草津から標高差で約五〇〇mふもとの小雨地区へと移り住み、五月になるとまた草津へ移動する習慣がありました。これらは「冬住み」の制度として集団で行われていた生活様式です。
また、入山地区には平家の落人伝説や、さまざまな民俗様式が今もなお残っているなど、歴史的な文化や風習が多く残っています。
大字赤岩は、村の南端に位置し、現在は赤岩、広池、鍛冶屋敷、高間の四つの行政区からなっています。このうち保存地区である赤岩地区は、白砂川が湾曲して形成された河岸段丘の左岸に位置し、標高およそ六八〇mです。段丘の一段目は緩い傾斜の農地で、主要な屋

周囲の山々や湖とともに幻想的な空間をつくりだします。また、野反湖は太平洋側と日本海側の分水嶺となっており、湖水は日本海に注いでいます。
現在の六合村と草津町は明治三三年に旧草津村から分村し、入山、生須、小雨、おとし、日影、赤岩の六つの大字からなる六合村は、古事記や日本書紀の中で東西南北天地の六つが合わさる国をなすことを「六合」と記述していたことからこの名称をつけたといわれています。
大正時代以前、小雨地区には「冬住み」の制度がありました。当時、草津で旅館業を営んでいた人々は、一月になるとお客も途絶え、豪雪で住むことのできない草津から標高差で約五〇〇mふもとの小雨地区へと移り住み、五月になるとまた草津へ移動する習慣がありました。これらは「冬住み」の制度として集団で行われていた生活様式です。
また、入山地区には平家の落人伝説や、さまざまな民俗様式が今もなお残っているなど、歴史的な文化や風習が多く残っています。
大字赤岩は、村の南端に位置し、現在は赤岩、広池、鍛冶屋敷、高間の四つの行政区からなっています。このうち保存地区である赤岩地区は、白砂川が湾曲して形成された河岸段丘の左岸に位置し、標高およそ六八〇mです。段丘の一段目は緩い傾斜の農地で、主要な屋



町並みについてのラジオ収録

木曾平沢らしい伝統的な景観の在り方を検討しています。広報部会では、木曾平沢でのまちづくりの実践を発信したり、情報の共有を図り、防災部会では歴史的な町並みにおける防災面について検討を進めます。女性部会は推進委員会の女性部の活動を引き継いだもので、先進地視察を企画・実施したり勉強会を開催したりしており、まちづくり活動の主体を担う皆さんの町並みに対する認識を高め、理解を深める機会を提供しています。

ちなみに、保存会ではホームページ(<http://www.kisohisawajp>)を開設し、順次内容の充実・整備を進めています。また、恒例の甘味をい

て、意見交換や夢を語ったり、町並みのルールなどについて話し合ったりしています。特に平成一九年度からは、木曾平沢地区でも修理・修景事業が始まる予定になっています。これは市内のもう一つの重要な伝統的建造物群保存地区である塩尻市奈良井保存地区で昭和五三年度から行わ



和気あいあいとした女性部会

れているのと同種の事業です。これにより、木曾平沢の皆さんの漆工町にかけける思いが、いよいよ具体的な町並みの整備に結びついていくこととなります。奈良井地区同様木曾平沢地区でも保存地区内の建物件数が比較的多いことから、ここ数年間は、ある程度まとまった数の件数の事業化が予想されます。今後は、重要伝統的建造物群保存地区塩尻市奈良井地区のまちづくり組織である奈良井宿保存委員会とも協働・連携して地域づくりをますます進めていくことにもなります。

木曾平沢では、公開している公共施設はありませんが、民間の漆器店工房などでは敷地奥の塗蔵、作業場などを公開しているところもあります。伝統的建造物群保存地区としては、いまだ整備はされていませんが、最も新しい伝統的建造物群保存地区の町並み漆工町木曾平沢と、温かみのある木曾平沢の皆さんのホスピタリティに触れるために、また、伝統工芸である木曾漆器の真髄に触れるためにもぜひ、漆工町木曾平沢へお越しください。最後に木曾平沢の歩き方として、注意点を一つ。漆器は紫外線に弱いので通常店舗は暗く、一見外からは閉まっているように見えることがあります。隠せずとどき中へ入って実際に手で触れてみてください。

(塩尻市塩川支所振興課町並み保存係主任 石井健郎)

長野県塩尻市木曾平沢

漆工町を守る人々

塩尻市木曾平沢地区は、長野県中部塩尻市内の南部に位置します。去る平成一八年七月五日に木曾漆器の漆工町として、重要伝統的建造物群保存地区に選定されたばかりの町並みです。その町並みは中山道に沿い、保存地区は木曾平沢の旧市街地を中心にしてJR中央西線と奈良井川に挟まれた東西約二〇〇m、南北約八五〇m、面積は二・五haに及ぶものです。町並みの構成は、街道に面して短冊状の敷地が奥へ広がるものですが、その通りに面した主屋については特に近代以降、漆工町として発展したことを反映して、近世から近代に至る多様な時代層や意匠が混在する複層的な構成になっています。



重要伝統的建造物群保存地区選定を祝う横断幕



にぎわいを見せる漆器祭（毎年6月上旬開催）

ます。一方で街路からは直接見えない敷地奥には、現役の木曾漆器の生産場所でもある塗蔵と呼ばれる木曾平沢独特の土蔵や作業場が控え、奥行き深い町並みになっています。木曾平沢地区は現役の漆器産地として現在でも我が国多数の地位を維持し続けています。

これまでの木曾平沢のまちづくりにおいて、

その活動に携わる住民の皆さんの活動に触れないわけにはいきません。ことに女性の認識の高まりが、木曾平沢の特に近年のまちづくりを大きく進めたことは間違いありません。平成一八年四月二五日に、それ以前の木曾平沢町並み保存推進委員会（以下「推進委員会」）の活動を発展的に改組して発足した木曾平沢町並み保存会（以下「保存会」）を中心としたまちづくり活動では、みずから守り育てること、我々自身に何ができるか、という問題意識に立ち自立的な取組を地域を挙げて続けています。特に保存会発足以降は、景観、広報、防災、女性という四つの部会に組織を整え、それぞれの課題について住民自らが責任をもって進める体制をとっています。景観部会では、



木曾平沢町並み保存会総会

「鮎市」と称して毎年一月一九日の夜明け前から、全国でもめずらしい鮎を売る市（露店）が開催され、市内外各所からの買い物客により正月料理の風物詩としてにぎわいます。こ

歴史継承と町並みの活用

現在、これからの町並み保存に大きく貢献する空き家対策の優良事例として、空き酒蔵を改修した蕎麦屋があります。開店後一〇年以上経ちますが、この店がもつ「食」と「おしゃれ」の雰囲気を目的に県外からの客も増えています。

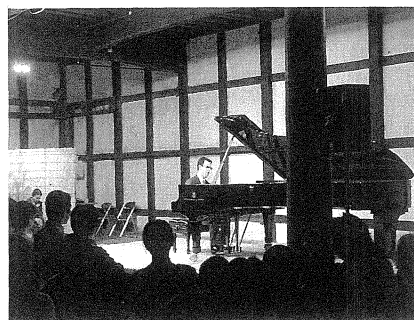
長の新たなアイデアが展開されています。

また、江戸期からの酒造業を継承する金波（屋号）は、終日、酒造りの各持ち場で多くの従業員が元気な姿を見せます。先日、部門別で日本一の賞をもらい、次のステップへ若社長の新たなアイデアが展開されています。

造の時間帯に漂うなんともいえないうまみある香りに、通りすがりの人たちもつい足を止めます。造りたての醤油を堪能した遠方の観光客から、直接、注文が絶えません。



「酒造り」の伝統を守る若い光武社長のチャレンジは続く



広さ150坪超の呉武酒造酒蔵でのコンサート

これは「フナコグイ」と呼び江戸時代からの風習として続き、二十日正月には恵比寿、大黒さんにお供えして商売繁盛を願い、昆布や根野菜といっしょに煮込む健康的な伝統料理としても食されます。

また、地元のまちづくり団体「NPO法人水とまちなみの会」が実施する各種事業では、地元小学生を対象に育成事業も兼ねて、保存修理工事を現在行っている茅葺武家住宅で今年七月に土壁塗り体験を行いました。昨年度は呉竹酒造の大型酒蔵で、全盲の世界的ピアニストである、桐剛之さんの小児ガン撲滅チャリティ&肥前浜宿まちづくりコンサートを開き、合わせて約八〇〇名の観客が酒蔵内のすばらしい反響効果によるピアノ演奏の澄んだ

音色に酔いしました。町並み一帯の特色を最大限に生かしたイベントとして、「一月と二月・肥前浜宿ウォーク」「三月・肥前浜宿花と酒まつり」「五月・肥前浜宿スケッチ大会」等、継続的な取組も行っています。市の平成一三年度モデル事業で修復された「継場（江戸時代に旅人の荷物を中継する場所）」を拠点として、まちづくり活動の広報と来訪者のサービスのために、ボランティア当番（観光ガイド、掃除、土産販売等）も行っています。

重要伝統的建造物群保存地区選定からの新たなスタート

この地区は交通が不便な面や、歴史的建築物の傷みが目立つ点はあるものの、他の町ではあまり例をみない時代をさかのぼったかのような風情と、古くひなびた感じながらも素朴なたたずまいの町並みにより、その雰囲気魅了された本物のリピーターも後を絶ちません。この町並みを確実に後世へ残すため、重要伝統的建造物群保存地区選定を契機としてNPO法人組織に地元の若手設計士グループも加入し、ソフト・ハード両面からの保存体制も動き始めました。

今後は町並み全体を地元共通の資産として、末代まで守られ続ける技術と意識の形成を目指していきたいと思っています。

（鹿島市建設環境部まちなみ活性課係長 岩下善孝）

佐賀県鹿島市

新選定 和洋建築が建ち並ぶ 佐賀鍋島藩の醸造町

威風堂々の町並み空間

「鹿島市浜中町八本木宿地区」は佐賀県南部に位置し、福岡と長崎からはJR長崎本線

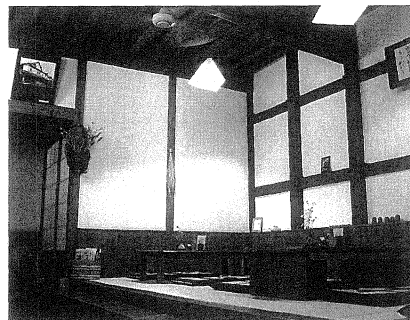


町並みに元気を与えるボランティアグループのがんばり

で約一時間の距離、福岡と長崎を結ぶ国道二〇七号線沿いに隣接しています。長崎街道の脇街道「多良海道」が町並みの中心を通り、浜川の川港による運輸の利便性を背景に、江戸期に端を発する宿場町や酒造などの醸造業を中心に発展し、多良山系からの水や有明海の魚介類を資源とする生活文化が育まれた街路と水路を骨格とする町です。町並みは防火構造の居蔵造町家や土蔵造大型酒蔵、武家住宅、洋風建築等、質の高い和洋建築が建ち並び、変化ある独特の風情を醸し出しています。



山口社長が造る「造りたて醤油」の味は格別



蕎麦処「西の蔵」の内装表現は小柳代表のこだわり

この地区から約一kmの場所には、年間約二八〇万人の参拝客が訪れる日本三大稲荷の祐徳稲荷神社があり、立地条件にも恵まれています。

今年七月五日には、浜川を挟み港町として栄えた茅葺町家が今も多く残る地区と、二か所同時に重要伝統的建造物群保存地区選定を受けることができました。

町並みの貴重な人材（人財）

多良海道のほぼ中央の通り沿いには、今なお代々の醸造業の歴史を受け継ぐ人たちがいます。

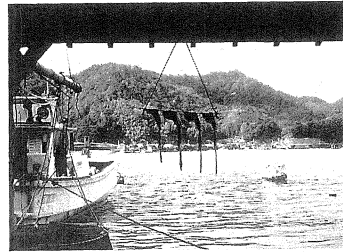
明治期から醤油製造を営む赤レンガ煙突が目印のヤマシヨウ（屋号）周辺では、醤油製

京都府与謝郡伊根町

伊根浦・倉家の正月

京都府北部の丹後半島に位置する伊根町伊根浦は、平成一七年七月、漁村として、また海面を含む伝統的建造物群保存地区として、初めて重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。

その伊根浦で漁業を営んでいる倉庄(くらやぶ)家の暮れから正月三が日の行事等について、聞き取り調査によって明らかになった点を紹介します。正月の準備は、一月中旬のキリメイカ



舟屋に干されたアオリイカ

作りから始まり、二・三日塩をしたアオリイカを一週間から一〇日かけて天日干しをして、かんかんに乾かします。そ

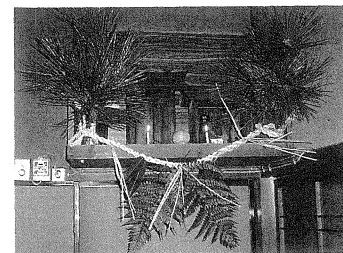
の後、以前ならワラに包んで大晦日まで舟屋に下げて保管していましたが、現在は冷凍庫で保管しています。

二月三〇日は、朝から昼前にかけて餅つきを行います。ついた餅は、ねずみや害虫から守るため、すべて土蔵に保管します。

二月三二日は、正月に神棚や船に飾り付けるしめ縄作りを主屋のオモテの間で行います。材料は、ワラ、ウラジロ、わかばの葉を使います。ウラジロは二股になった茎を、わかばは葉だけを裏山から採ってきます。ウラジロは裏が白いことから、人生、色の変わらないようにという意味で、わかばはゆずり葉ともいわれ、家系を譲っていくという意味で、代々しめ縄に使われています。しめ縄は、ワラを手前にして左撚りで編んでいき、途中にワラの茎を七本、五本、三本と出し、七五三の形を作ります。その五本のところにウラジロを挿し込みます。三本と五本、五本と七本の間には、わかばの葉二枚を使って八の字に挿し込みます。

末広りの意味があります。左撚りで編んでいくことは手前に引き込むことになり、「なんでも懐に入れるため」の意味をもっています。このように長さ約一五〇cm、直径三cmのしめ縄を作ります。

女性は、これらの作業中はオモテの間へ入ることが許されていません。理由はわかりませんが、代々そのように倉家では伝えられています。三方に盛るお供え物として串柿があります。一串に一〇個の柿が並びます。両側に二個ずつ(夫婦の意味、中に六個(仲むつまじくの意味)並び、夫婦仲むつまじくといわれています。神棚には餅を二個ずつ供え、しめ縄を張ります。松の木を神棚の両側に一本ずつ挿し、松から松へしめ縄を張ります。すべて飾り終えらるるとお灯明をつけて、「これで終わりでした。正月を迎えてください」と唱え、準備が整います。大晦日まで保管されていたキリメイカは鯛といっしょに膳に載せてオモテの間に置いておきます。船の飾り付け



しめ縄が張られた神棚

は、しめ縄以外に大漁旗、松・竹・梅の木をひとくくりにしたものをマストにくくりつけます。この飾り付けは、三が日はそのままにしておきます。

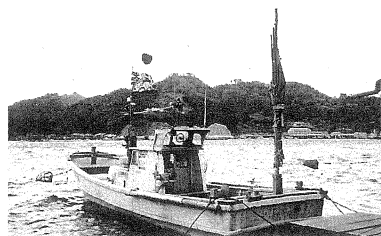
一月一日は、朝四時ごろに家主が起きます。正装で若水をくんでお湯を沸かしお茶を入れ、神さん仏さんに供えます。若水は、以前は自宅の井戸から汲み上げた水を使っていたが、近年は水道水を使用しています。お茶を供え終わると、家主は赤みその雑煮を作り、神さんや船霊(はねたま)さんに供えます。キリメイカは、二切れを皿に入れ雑煮やおせち料理とともに家族全員でいただきます。

奥さんは、早起きはしません。昔から倉家は家主が「奥さん起きてください」と言って声をかけるまで起きてきません。さらに奥さんが朝の身支度をする間に、家主は家族の雑煮を作ります。正月の三が日は、代々家主が作り、奥さんは何もしないことになっています。その理由はわかりませんが、父親から聞き伝えられたとおり、今もそのように行っています。以前はどの家もこのようでしたが、今は若い家主の場合は奥さんが作っている家もあります。しかし、昔ながらの伝統を守っている倉家では、家主が行っています。

昼前に船の乗り初めをします。船霊さんに



正月の飾り付けがされた床の間



大漁旗を掲げ出初めを待つ

お膳に載せた鏡餅と串柿二串を供え、鯛を載せたお皿と、八合の米を入れその米に八坂神社のお札さんを押した一升瓶を船上に置きます。

「海上安全」

と「大漁」を祈願し、船霊さん、船首、船尾にお神酒を供えます。なお、女性は三が日は船に乗ることが許されていません。

一月二日の朝、船の出初めをします。朝六時ごろから沖へ出港し、昼前に帰港します。捕ってきた魚は、新婚さんや若い夫婦が二日に親元へ新年のあいさつに行くので、お土産として持たせます。

一月三日は、特に何もなくてのんびりと過ごします。

今回の聞き取りでは、暮れから正月三が日の様子を調査しました。普段と違う男女の役割りや過(としな)に驚き、また、いわれは不明であるにもかかわらずその伝えを守り取り組んでおられる倉家の様子がうかがえました。

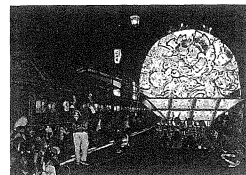
(伊根町教育委員会 梅崎 良)

作られるこみせの空間、それが連続することによってできあがるこみせ通りと呼ばれる通路空間。中町の景観を特徴づけるこみせは、家の入り口と道路との間にある曖昧で不思議な空間です。

こみせ本体は現在、個人所有の建築物の一部であり、本来は私的な内部空間であるはずですが、にもかかわらず、こみせ通りとして連続することにより、不特定多数の人々に利用される通路として中間領域的な性質をもつことになりました。

私有地でありながら誰でも躊躇なく踏み込むことができるこの不思議な空間は、実にさまざまな機能をもっています。夏の日ざしや雨を遮り、冬は雪を避けて通行できるかけがえのない歩行通路。また、ここにとどまる人々にとっては、知人とのあいさつや情報交換の場です。子どもたちの遊び場にもなりました。さらに、商業発展上の効果もあります。気兼ねなくこみせに足を踏み入れた人々は、そのとき店舗の中に入り込んでいることにもなります。さらに、そのまま店の奥に進んで買物を始める人もいます。そのような効果をねらって、商店主たちはこみせを存続させてきたという一面もあるのです。

黒石には昔から「こみせは自分のものであって、自分のものではない」という考え方があり、こみせの所有者にとっても利用する人々



黒石ねぶた祭り



黒石よされ

にとつても、私有地を通路として提供するものはごくあたりまえのことになっていました。個人の土地を提供して公共の通路を確保しているという形態が長い間続いてきました。これは、非常に珍しく、また誇れるものであるといえます。

長い年月、連続と受け継がれてきた思いのもとに保存されてきたこみせ通りは、訪れる人々をどこか懐かしいような気持ちにさせてくれます。こみせの中を歩きながら、静かで穏やかな時間の流れを感じることができました。ただし、夏のひとときだけはまったく違う表情を見せてくれます。

青森県の各地で行われるねぶた祭り。運行台数最多を誇る黒石では七月三〇日から八月五日までの七日間、「ヤレーヤレーヤ」の掛け声とともに大小さまざまなねぶたが市内を練り歩きます。天明六年（一七八六）には「七

ねぶた、そして黒石よされ

「夕祭」としてさかんに行われていたという記録が残っており、また、明治十一年（一八七八）イザベラ・バードがねぶた見物を楽しんだことを『日本奥地紀行』に記しています。

そして、日本三大流し踊りの一つに挙げられる「黒石よされ」。起源は、五〇〇〜六〇〇年前の男女の恋の掛け合い唄であるといわれています。一糸乱れぬ華麗な踊りで詰めかけた沿道の観衆を魅了し、流し踊りの合間に行われる廻り踊りでは観客が踊りの輪に飛び入ります。津軽の短い夏を惜しむかのように夜遅くまで町中が熱気に包まれます。

こみせ通りの未来

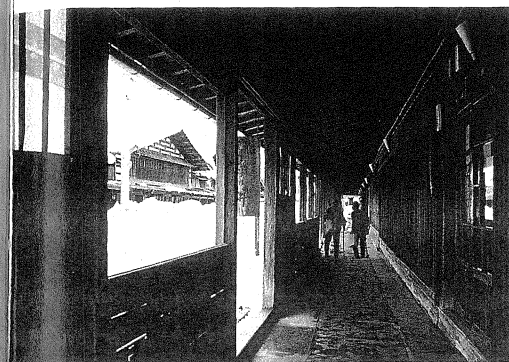
今黒石では、さまざまな活動が行われています。秋と冬に開催される「こみせまつり」は、回を重ねるごとに訪問客が増えています。「こみせ保存会」には市外や県外の方も多数参加して、こみせ通りの未来を語り合っています。先祖から受け継がれてきた貴重な歴史的資産でもあるこみせ通りを次代に残していくために、皆で知恵を出し合って着実に保存・復原を進めていくことを目指しています。

ぜひ一度、こみせ通りに来ていただいで、こみせの空間を体感してみてください。

（黒石市教育委員会文化課建造物専門員 三上厚子）

青森県黒石市

「こみせ」が連なる 津軽の商家町



冬のこみせ通り：柱の間に落とし込んだ「しとみ」が吹き込む雪を防ぐ

津軽の長く厳しい冬。しとみが雪の吹き込みを防いでくれるこみせの中を、雪のついた分厚い毛糸の帽子とモコモコに膨れたアノラック姿のおばさん二人が、なにやら楽しそうな話をしながらゆつくりと歩いていきます。

吹雪の日でも、こみせの中はなぜか暖かいの

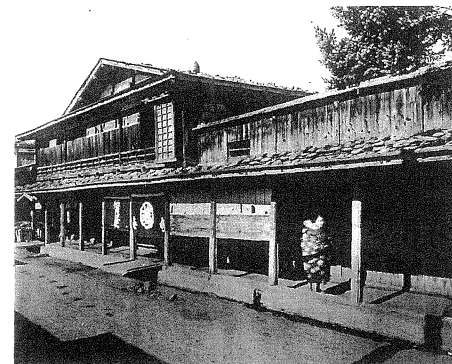
です。道路側に一間おきに並ぶ木の柱の上に、ひさし状の屋根が載った格好の通路空間が、通る人々を優しく守ってくれるのです。

江戸時代から長い時間の中で、変わることもなく保存されてきたこみせ通り。その価値が、今見直されています。

こみせ通りの歴史

「黒石津軽家」が誕生したのは、今から三五〇年ほど前、江戸時代前期のことです。弘前藩三代藩主津軽信義の急死により、わずか一歳で藩主になった信政の後見役に命じられたのが信義の弟津軽信英でした。明暦二年（一六五六）、信英が弘前藩から五〇〇〇石を分知され、黒石初代領主となりました。

信英は陣屋を造るとともに、分知以前からある古い町並みに待町、職人町、商人町を加えて、新しい町割りを行いました。これが現在の町並みの基本になっています。また、信英は商人町にこみせを作ることを奨励したとい



昭和初期のこみせ通り：線草会編『民家図集』（大塚巧芸社、1930〜31）に掲載されたこみせのある呉服店

われており、このとき以来、中町はこみせのある町家が連続する独特の景観を守り続けることになったのです。

こみせは、藩政時代には公有地に作られたものであり、公のものとして扱われていました。その後、明治の地租改正時に私有地になりましたが、完全な私有財産になったにもかかわらず、人々の通行を妨げることなく公共の空間として、現在も存在し続けています。

こみせの空間と人々の思い

江戸時代から、中町の通りは浜街道とも呼ばれ多くの人々が集まり、商店や旅館が建ち並んでいました。その中町の繁栄に大きな役割を果たしてきたのが、こみせの存在です。主屋の前面にひさしを張り出すことによって

長崎県雲仙市

歴史の風薫る 感幸のまちづくり 神代小路伝統的建造物群保存地区

地区の概況

「こんにちは、のまい」「な～い（はい）」。今でも佐賀藩であった名残を残す言葉が交わされ、景観とともに伝統的な文化が息づくまち、神代小路。

雲仙市神代小路地区は、長崎県島原半島の北部に位置し、雲仙岳を起点として北に広がる肥沃な台地と、有明海の恩恵を受けて古くから栄えてきた地域です。神代の地は、島原半島と熊本・佐賀につながる海路の要所であり、戦国時代末期には佐賀の龍造寺氏と島原半島を勢力下に置く有馬氏の覇権争いの中で神代氏はその姿を消すこととなります。

その後、神代の地は九州国割を経て佐賀領に編入され、明治の版籍奉還まで続く佐賀藩神代鍋島領が成立しました。

保存運動の始まり

維新後も神代小路は、旧領主鍋島家を中心

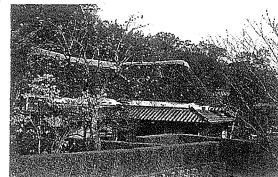


旧領主邸宅にふさわしい威厳を醸し出す鍋島邸主屋

に地域のまとまりを保ち、屋敷割・道路・水路といった基本構成と武家屋敷の建造物群が、



鍋島邸長屋門



茅葺の武家屋敷

地区を取り囲む河川、古城の森とあいまって自然豊かな景観を今日に伝えています。しかしながら、老朽化する家屋、進行する高齢化といった地域の課題が徐々にクローズアップされるようになり、平成一〇年、地元有志七名により「神代小路まちなみ保存会」が結成され保存運動が始まりました。時を同じくして、教育委員会部局において神代小路まちなみ保存の基礎調査が実施されることとなり、以後、住民・行政の連携によるまちづくりが今日まで取り組んでいます。その過程において、伝統的建造物群保存地区制度を活用したまちづくりを目指し、平成一七年七月に重要伝統的建造物群保存地区の選定を受けることができました。

保存活動の展開

以下、官民共同で取り組んできた、まちなみ保存運動の一例を紹介します。



電柱が移設された沿道

①町並み写真展と講演会

平成二二年度、まちなみ保存に対する意識高揚を目的に、明治から昭和初期の小写真展と大

学教授による講演会を開催しました。旧領主館である鍋島邸を会場に実施したこともあり多くの方々に参加いただくことができました。

②電柱移設

沿道に伸びる電線と電柱は、生活インフラとして不可欠なものです。景観構成上はしばしば問題となります。経費の点から埋設ではなく移設に取り組み、平成一二年度、関係機関のご協力を得て、電柱を道路から屋敷地の裏へ移設することができました。移設地の民家敷地提供について保存会の積極的な活動とご苦労があったことは言うまでもありません。

③生垣剪定ボランティア事業

当地の景観構成要素として生垣が挙げられます。高齢化が進む地域において、広範囲に及ぶ生垣をみずから剪定管理していくことは、住民にとって大きな負担となってきました。保存対策調査時に庭園調査を依頼した大学

の好意により、大学生の実地研修と地元ボランティア育成を目的に神代小路地区の生垣を剪定する、生垣剪定ボランティア事業を企画しました。この事業は平成一四年度から不定期ながら今日まで実施されています。

④還れふるさとヘコール事業

地元を離れ県外で暮らす地元出身の方々と故郷をつなぎ、Uターン啓蒙を視野にいれ、ふるさとの様子をお知らせする事業です。ふるさとの写真や風景イラストを取り入れた、カレンダー、絵はがき、ビデオを作成。資料収集、編集、ロケまですべて住民により行われ、好評を得ています。

その他、広報誌作成、疎水清掃事業、まちなみスケッチ大会など精力的な活動が行われています。

まちづくりを支える力

まちづくりを支える若い居住者が少ないのが、神代小路地区におけるまちなみ保存運動の大きな課題ですが、昨年、まちづくりを支援する若手組織「神代鍋島塾」が結成されました。この団体の基盤は神代地区の商工会青年部ですが、重要伝統的建造物群保存地区選定をきっかけに故郷の文化資源を活用したまちづくりに取り組むもうと組織を再編し、現在は五〇名を超える会員が所属しています。平成一七年三月に開催した重要伝統的建造物群



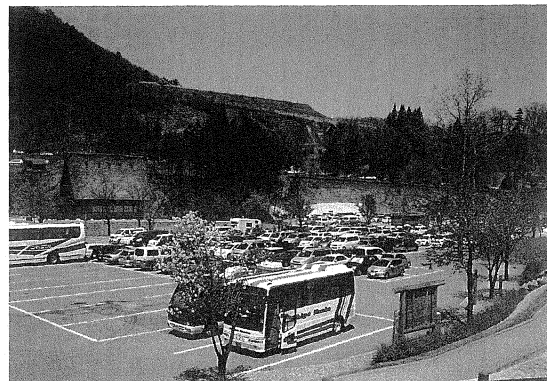
神代鍋島塾の協力で重要伝統的建造物群保存地区選定シンポジウムは大盛況

業、建設業など幅広い職種の会員が集まっており、各自の特技を生かした今後のまちづくり支援の展開が楽しみです。

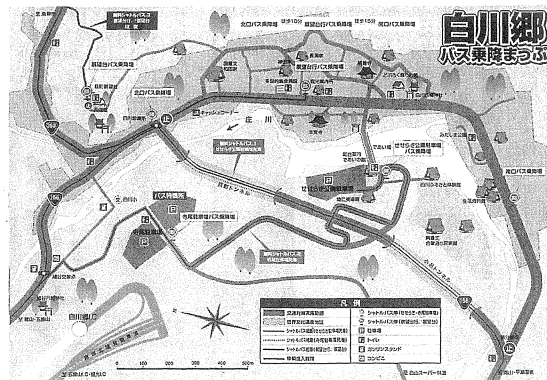
感幸のまちづくりを目指して

伝統的建造物群保存地区制度を導入し、ハード面からの保存事業はスタートすることができました。しかしながら、まちなみは住民が伝統と文化を継承しながら生活することによって成り立つものです。今後、空家対策、観光との両立、居住区としての住環境整備など多くの課題を抱えています。当地では、居住する人も、地域を訪れる人も、伝統的な景観と空間を共有し幸せを感じられるまちづくりを目指し「歴史の風薫る 感幸のまちづくり」をまちなみ保存運動のテーマとしています。今後も幸せを感じるまちを目指して保存運動に取り組んでいきたいと思っています。

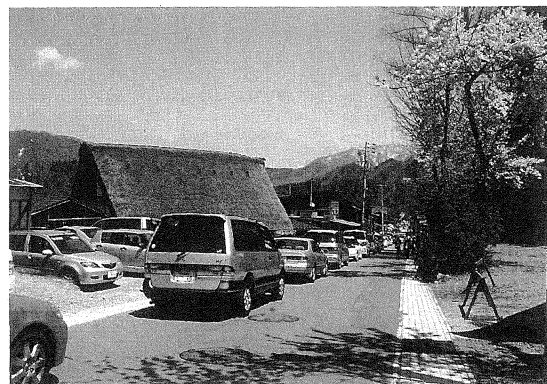
(雲仙市教育委員会生涯学習課係長 柴崎孝光)



村営の駐車場



萩町交通制限図



萩町に入ろうと車が行列

が実り昭和五十一年の重要伝統的建造物群保存地区選定につながりました。さらに次の問題として、萩町地区は伝統的建造物群保存地区制度としては特殊な農村であり、当地区全体を面として捉え、混在する一般家屋、農地、農道、水路に至るまでを考慮した保護施策をもつ必要がありました。この問題に対して、持続的な財源確保を目的として保存基金の運用利息の活用を図り独自の事業を進めることとし、さらに、村営駐車場を整備し駐車料金の一部を保存協力金として徴収させていただく

ことで修景事業並びに観光プランや環境物件調査事業など充実した事業を進める施策を整えました。平成九年には、これらの事業を専門的に進めるために保存財団を設立し、これまでの保存の主体であった住民と行政の二者に保存財団を加え、三者が協働して行う新たな体系を創設し保存事業を進めています。現在、特に取り組んでいる問題は、地区内への観光車両の進入量の増加があります。平成七年に当地区が世界遺産登録を受けて以降、急激に増加した観光車両によって景観の悪化

並びに住民生活への不安や散策される方々への危険性につながる状況にあることから、パーク&ライドシステムの運行を進めるなど、地区内で安心して観光ができ生活できるまちづくりに取り組んでいます。具体的には、本年は毎月第三金曜および土曜に観光車両の進入制限を実施いたしますので、遠くからお出かけださった方々には多少のご不便をおかけいたしますが、そのぶん白川村の良さを歩いて満喫してください。

(白川村教育委員会文化財係長 近藤久豊)

岐阜県大野郡白川村

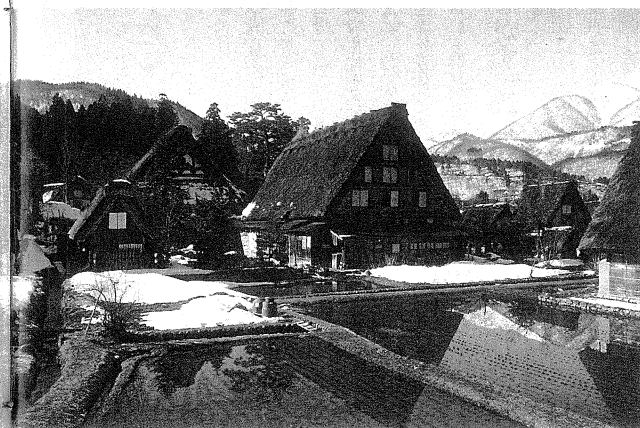
保存と活用を考える人々

岐阜県大野郡白川村は、県北西部の石川県・富山県との県境に位置し、白山連峰の険しい

山岳地帯と有数の豪雪地帯といった気候が重なり、長く他の地域との交流が限られたこと



うっすらと雪に覆われる萩町

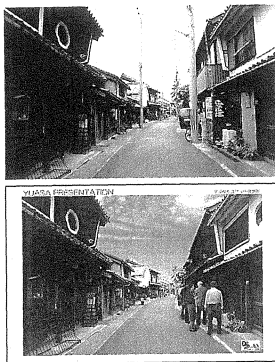


切妻合掌造り家屋

保存運動を進めるうえで当初の問題として、保護制度のない時代にあつて合掌造りを維持することは、所有者にとつて日常生活の面や経済的な面など多大な負担を強いることとなりました。そこで、合掌造り民家を活用した民宿経営など観光をうまく利用することによって経済的負担の緩和を図ると同時に、文化財としての価値づけを求め陳情活動に奮闘した結果、これらの努力に至りました。

から秘境の地として広く知られていました。山間地であるため稲作は少なく、焼畑農業に炭焼きや薪や漆採取などが行われ、江戸時代に入ると塩硝の生産や養蚕に主産業を求め、住居と産業を兼ねた合理的かつ独特の大型民家として切妻合掌造り（以下「合掌造り」）家屋を生み発達させてきました。妻面を南北に並行に向けた家々が周辺の水田と山々に包まれて四季折々の美しい農村景観を作り出しました。しかし、高度経済成長期を迎えると養蚕業の衰退に加え、ダム開発などにより合掌造りの多くがその姿を消していく時代を迎えます。このような中、萩町地区では白川村らしさが色濃く残されていたことから昭和四十六年に地区住民総意による自治活動として保存会を設立し、本格的な保存活動が動き始めるに至りました。

保存運動を進めるうえで当初の問題として、保護制度のない時代にあつて合掌造りを維持することは、所有者にとつて日常生活の面や経済的な面など多大な負担を強いることとなりました。そこで、合掌造り民家を活用した民宿経営など観光をうまく利用することによって経済的負担の緩和を図ると同時に、文化財としての価値づけを求め陳情活動に奮闘した結果、これらの努力



現在の町並み(上)とフォトモンタージュによる整備後のイメージ

すっかり溶け込んでいて、漆喰壁も虫籠窓も格子も、なにもかもごくあたりまえの景観でしたから、町並みの歴史的価値に気がつかなかったのです。

そんな住民の意識が変化し始めたのは、来訪者との交流がきっかけでした。町並みが新聞やテレビなどのメディアに取り上げられるようになり、まちを訪れる人が増えてきました。あいさつがてらに「どちらからおいでなされたんですか」と尋ねると「〇〇です。今日は町並み散策に来ました」という返事が返ってきます。遠い所からわざわざまちを見に来るなんて思っていると、「ここはとてもいいまちですね」「懐かしい感じがしていいですね」「お醤油のいい香りがしますね」と続きます。こうした出会いが度重なり、徐々に自分たちのまちの良さに気づき始めました。

こうなると、今度はもつとまちを良くするために自分たちでできることを考え、取り組むよ

うになってきました。消火器の設置箱を町並みに調和したものに取り替え、エアコンの室外機などは目隠しして修景しました。各家の軒先につるした手作りの行灯は、陽が落ちてほのかな灯りがとると、ほんのりとした情調を醸し出します。また、町家の格子などに蒸籠を使つて詩歌や古民具などを展示する「せいりミュージアム」など、まちを訪れた人に楽しんでもらうもてなしも工夫され、最近では、語り部による町並みの案内も始まっています。

また、町外からもまちづくりへの協力を惜しまない方々の応援がありました。パソコンを使つて写真を絵画のように仕上げるデジタルスケッチや、写真を加工し、町並みから電柱などを消し去り修景するフォトモンタージュという手法でまちづくりの提案をいただきました。これら提供していただいた作品は、町並みの魅力と保存整備のイメージがひと目でわかり、住民の皆さんにもたいへん好評でした。

対外的な交流やまちづくりだけでなく、保存地区内にある四つの自治会では住民どうしの交流も進められてきました。保存地区の北西端には、周辺が埋め立てられるまでは海に面していた恵比須神社があります。七月二日の『えべっさん』は漁師による神事だけとなっていました。約二〇年振りにお祭りとして復活させ、昨年で四回目を迎えました。また、湯浅の氏神である額国神社の一月一八日の

政がお互いの役割を認識した取組が実を結び、平成一八年二月一九日に全国で七九番目、和歌山県では初となる重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。



秋祭りの時代行列

新たな歴史を刻むスタート

町並み保存を通じて、良質な景観の形成や歴史・伝統を守り継ぐことの重要性が再認識され、コミュニティの結束力が強まってきました。そして、以前はかわかることが少なかった各自治会間での交流も活発になってきています。こうして、古い町並みの保存から新しいまちづくりが始まりました。みんなでまちの将来を考え、次代へとつないでいく息の長い取組がこれからも続いていきます。重要伝統的建造物群保存地区の選定はゴールではなく、まちの伝統を守りながら新たな歴史を刻むスタートです。

(湯浅町教育委員会伝建推進室係長 前田和昭)

和歌山県有田郡湯浅町

醸造文化の歴史が薫る 紀州湯浅の町並み

熊野古道と港の醤油醸造町

和歌山県の中部西岸に位置する湯浅町は、周りを海と山が取り囲む自然環境に恵まれた小都市です。古くから熊野参詣の宿所の役割を果たすなど、陸運・海運の重要な拠点であり、漁業や商工業で栄えてきました。とりわけ湯浅を特徴づけたのは、鎌倉時代に伝わった金山寺味噌の製造過程から生まれたといわれる醤油の醸造です。室町時代の末期には商品として出荷され始め、江戸時代に入ると紀州藩の保護もあつてさかんに製造されるようになり、文化年間の醤油業者は九二戸に及んだといわれています。

保存地区は一六世紀末ごろ、熊野街道西方の海辺に開かれました。近世から近代にかけて醤油醸造業が最もさかんであった一帯にあつて、まちが発達されて以来の『通り』や『小路』で構成された特徴的な地割と、醸造業関連の町家や土蔵を代表とする伝統的な建造物

がよく残されている地区です。切妻造平入、大壁漆喰塗に本瓦葺を伝統とする町並みには、伝統製法を守る老舗醸造家から醤油の芳香が漂ってきます。

歴史を生かしたまちづくりの提言

湯浅の町並み保存の取組は、町のまちづくり諮問機関として平成九年に設立された『まちづくり委員会』の中で「湯浅の伝統ある歴史や町並みを貴重な財産として見直そう」という声が上がったことに端を発します。まちづくり委員会は、公募委員など町民の代表者による委員三五名と専門委員若干名を中心に組織され、三〇〇名にのぼる協力推進委員のサポート体制で運営されました。二年間で全体会一七回、各部会を合わせると総計二四〇回以上の会議を経て平成一一年に出された答申には、伝統的建造物群保存地区制度による町並み保存が重要施策として位置づけられました。そして紆余曲折ありながらも、住民と行

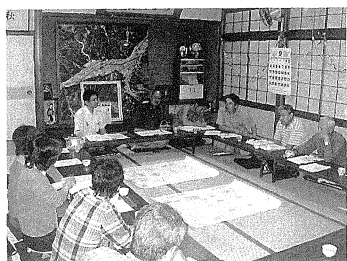


祭りの時期には町並みに提灯が飾られる

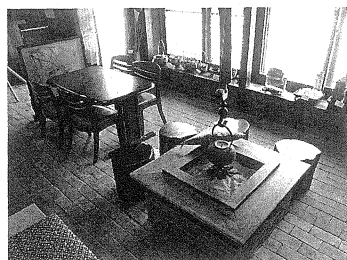
自分たちでできること

選定までの道のりは、最初から順調に進んだわけではありませんでした。歴史的な町並みとはいえ、そこで生まれ、生活を送ってきた人々にとっては珍しいものでもなんでもありません。伝統的な町家や醤油蔵は日常の景色に

秋祭りには各自治会から神輿が出されますが、保存地区からは時代衣装に身を包んだ行列も参加するようになり、伝統行事に彩りを添えています。



マスタープラン会合の様子



自立の芽、レストハウスに進化する
旧逸見勘兵衛家

会長からは、「熊川宿は観光地化を進めています。これに対し河合の考えは変わっていません。ここに住む住民みんなの生活を第一に考えなければなりません」と述べられました。このことは、過去に何度か話題になってきたようですが、再びこの場でも、熊川宿は観

委員長 岩本 実

少子高齢化の波は熊川にも押し寄せ、将来のまちづくりの大きな不安要素ともなっています。選定以前の平成六年には、住民の手による「熊川まちづくりマスタープラン」が策定され、これが今日まで、まちづくりの指針となってきました。しかし私たちを取り巻く環境の変化とともに、新たに発生した課題への対応をどうするか。また、美しい歴史的な町並みを守りつつ、熊川のまちづくりをどのように持続発展させていくのか、という大きな課題が現前してきました。そこで、早急に「第二次熊川まちづくりマスタープラン」を策定することが必要になってきたのです。

「第二次熊川まちづくりマスタープラン」の策定委員長を拝命することとなったのです。最初はその重責に躊躇しましたが、河合会長の若い人材育成への思いを知り、だれかがやらなければいけないことだと思い返して、若輩者ですが謹んで引き受けることにいたしました。「第二次熊川まちづくりマスタープラン」は、住民自らが熊川の自立の方策を明らかにするとともに、熊川のもつ資源のさらなる活用を進め、持続可能な発展を図ることを目指し策定することといたしました。

光地化を積極的に進めるものではないことが確認され、策定委員のメンバーもその考えに賛同いたしました。そして、それと並行して、熊川宿のまちづくりを持続的に発展させていくには、熊川の自立が不可欠であり、熊川宿を訪れる人々へのおもてなしの心を忘れてはならないという新たな結論を得ることになったのです。

マスタープランの検討を始めるに当たっては、住民から幅広い意見を聞くことと、プラン参画意識を共有していただくことを目的として、区民の二五歳以上全員を対象にアンケート調査を実施しました。そしてプランニングも終盤にさしかかろうとするころ、熊川宿においての自立を目指す動きが出てきました。熊川を訪れる人に対して何かおもてなしをしようというところで、「熊川宿おもてなしの会」が発足したのです。小さな芽ですが、確かな自立の芽です。民家改修のモデルハウスとなつて一般公開されている旧逸見勘兵衛家を活用し、ゲストハウスからショップハウスへ、さらにレストハウスとし進化させていこうという動きです。これが足がかりとなり、自立に向け、みんながよくなる活動がさらに活発になれば、こんなにうれしいことはないとい大いに期待しております。

福井県三方上中郡若狭町

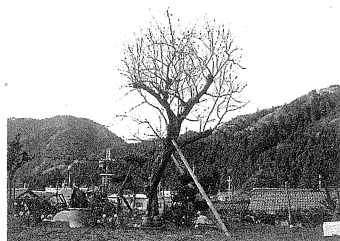
生まれ育った熊川への帰郷 選定一〇年、そしてこれから……

ここは若狭鯖街道熊川宿、私が生まれ、一八歳まで育った町です。滋賀県境に位置する福井県三方上中郡若狭町熊川で、人口三〇〇人余りの山に囲まれたのどかなところ。春になると山々には緑があふれ、心地よい前川のせせらぎの中、夏になるとセミの合唱。秋には、上ノ山（我が家のすぐ裏にある丘高い山）には柿がいっぱいになりました。この柿の木は台風で何度も倒れましたが、そのたびに起

こし、今では竹でつんばりをしています。杖でもついているような老木となっていますが、上ノ山から我が家を見守ってくれているように思えます。冬には一mを超える雪が降り、雪かきの毎日です。そんな幼少期から成人し大阪へ出て、私も家庭をもつこととなりました。そして、なにげなしに過ごしてきたふる里が、重要伝統的建造物群保存地区の選定を受けると父から聞いたとき、驚きとともにうれし



桜が満開の熊川宿の朝



上ノ山の柿の木



清らかなせせらぎの前川



復活した「てっせん踊り」

さがこみ上げたことが今も記憶に残っています。この平成八年は、当時小学校五年生と二年生の子どもを連れて、一八年前に熊川に帰ってきた年でもありました。それから一〇年余りの間に、民家の修理や景観整備事業などのハード事業をはじめ、河合健一会長率いる「若狭熊川宿まちづくり特別委員会」を中心としたソフト事業として、手作りの木製ポストの設置や、八〇年間にわたって途絶えていた「てっせん踊り」の復活による伝統芸能の継承活動なども活発に行われてきました。また、平成一五年には、町並み保存への共通認識をもつことを目的として「若狭熊川宿まちづくり憲章」「若狭熊川宿の自立したまちづくりを進めていくための申し合せ事項」も策定されました。

さて、熊川宿も重要伝統的建造物群保存地区の選定を受けてから九一〇年が経過し、マスコミなどの影響で、ここ数年の間に観光客が激増し、私たち住民の生活へさまざまな影響が出てきました。また、全国的な

の景観にも価値が認められています。集落の山側の上には雪持林といってブナ、トチ、ミズナラなどの大木が生い茂っています。この雪持林は雪崩から集落を守っています。そのほか水田用の水路も含めて、集落景観を成す重要な要素として、茅葺きの合掌造りを中心に据えながら、山深い地における農村の原風景を伝え、全国でも珍しい景観を守っています。

景観の保全の努力

国の史跡に指定されてから、世の中が大きく発展し生活が豊かになる中、集落住民は生活優先が保存優先か議論を続けながらも、保存を第一として努力を重ねてきました。住民のいちばんの願いは、自宅のすぐ横に車庫を建てることでした。しかし国の史跡を受けたからは車庫を建てるなど、現状変更は望ましくないものではあります。最終的には住民納得のうえで理解が必要でした。以来、新しく建物を建てることなく、しかも取り壊すことなく、集落の景観を守ってきました。

そのほかに、住民は民家の周りの田畑が荒れることがないようにしながら、花畑では季節の花が咲くように心がけ、常に家の周りの環境美化に努めてきています。観光客からは「花がきれいに咲いていますね」「こみが落ちていて、家の周りはきちんと片付いています」



春祭りの獅子舞に集落の結束を確かめ合う

春祭りの獅子舞に集落の結束を確かめ合う

雪期には寺や神社の屋根雪降ろしなど、集落総出で作業を行います。今年の五月には、消火栓用の貯水タンクに堆積してい

ね」とお褒めの言葉をいただいています。

集落を守る意気込み

相倉集落は現在では戸数二戸、人口は六〇人近くで高齢者の比率はかなり高くなっています。独り住まいの家もあり、年々集落の運営や合掌造りの保存に影響が出てきています。しかし、今年も四月二〇日と二二日に春祭りを盛大に行うことができました。若者が減少していく中、獅子舞の維持は住民の意気込みであり、集落の結束を確かめ合う場でもあります。この獅子舞は観光客に見せるためのものでなく、先祖から受け継いだ祭礼として守り続けています。

また総普請といつて、四月には雪解け後の集落美化と春祭りに向けての準備、五月には集落の道路清掃、七月には道路や神社の周りの草刈り、一二月には雪囲い、積雪期には寺や神社の屋根雪降ろしなど、集落総出で作業を行います。今年の五月には、消火栓用の貯水タンクに堆積してい

た砂を、半日がかりで取り除きました。

合掌造り集落を守る意気込み

合掌造り集落を守る意気込みは昔から脈々と受け継がれ、強いきずなで結ばれています。

保存に向けて保存財団設立

集落内の人口が減少し、高齢化が進む中で合掌造り集落を維持保存することを目的として、平成一〇年に「世界遺産相倉合掌造り集落保存財団」が設立されました。収入源としては観光客の駐車料金を「保存協力金」としていただいています。そのほかに民俗館の入場料やキャンプ場使用料などもあります。

保存協力金は、合掌造りの屋根葺き用の茅を確保するために、茅の育成と茅刈り作業の人員費などに使われています。そのほかの財団の仕事には集落内の環境美化や積雪期の除雪作業があります。保存財団が設立されてから住民の負担が軽減され、財団の機能がうまく果たされています。今後はさらに茅場の保存と茅の確保に努めてほしいと願っています。

(相倉史跡保存顕彰会長 図書健裕)



駐車場に隣接する保存財団事務所（合掌造り）

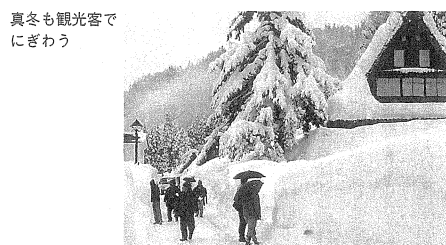
富山県南砺市

合掌造り集落を守る住民

今年も大型連休にたくさん観光客が集落に訪れました。しかし、住民にはふだんと変わらない生活があります。観光客が通るそばの畑では耕運機による畝作りが行われています。別の畑では夫婦がジャガイモの種芋を植えています。お年寄りが道端の草取りに精を出しています。



相倉合掌造り集落全景



真冬も観光客でにぎわう



集落総出で屋根の雪降ろし

ています。民家の物干し竿には洗濯物が春の風に揺れています。このように集落全体から住民の息遣いがしてきます。観光客に気をつかうことなく、ふだんとおりの生活と営みが行われています。

富山県南砺市の相倉合掌造り集落は富山県

南西部に位置し岐阜県境に近く、日本有数の豪雪地帯、五箇山にあります。集落は庄川の川面より高く離れ、周囲を山林で囲まれた標高四〇〇m前後の河岸段丘面に二〇棟余りの合掌造りが点在しています。

昭和四五年に国史跡に指定され、平成六年に重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。翌年の平成七年二月に日本で六か所目の世界遺産となりました。四季折々に表情を変える深山の自然と、三角形の屋根をした合掌造りの姿は訪れる人々を魅了し、郷愁の世界へと誘います。今では厳寒期でも除雪体制が確立しているので年間をとおして多くの観光客が訪れます。

集落景観の保存のリスト

当地の保存地区は屋敷地と耕作地が中心となっています。屋敷地は周囲に石垣や生け垣を設けることなく、合掌造りや瓦屋根の民家の周りには田や畑の耕作地が広がっています。集落の背後には石垣で築いた段々畑があり、そ



観光客が通るそばで行われる農作業

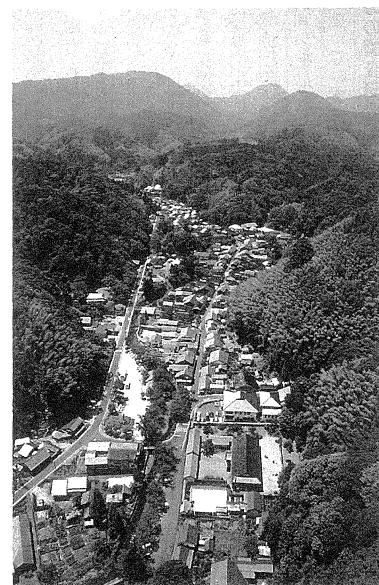
島根県大田市

文化財とともに暮らす 町並み

大田市は島根県のほぼ中央に位置し、人口は約四万人で日本海に面しており、国立公園三瓶山に代表される豊かな自然に囲まれています。

平成一七年一〇月には、旧大田市と旧仁摩町、旧温津町が合併し新大田市が誕生しました。今年七月、世界遺産に登録された石見銀山遺跡は、新大田市にあります。

昭和六二年に国の選定を受けた大田市大森銀山伝統的建造物群保存地区は、谷あいには家屋が細長く連なる人口約四〇〇人の小さな町で、かつては銀山でにぎわいました。保存地区の名称は、陣屋町である「大森町」と鉾山にかかわる「銀山町」の二つの町で構成されて



大森銀山の町並み

いることから「大森銀山地区」としました。過疎化が進む昭和四九年に最初の町並み調査が行われ、その成果を基に昭和六二年に選定されました。以降、修理・修景が進み、U・Iターンされる方が少しずつ増えています。世界遺産登録への期待の高まりとともに近年急増していた観光客数は、登録決定によってさらに増加する傾向にあります。こうした

中、地元の生活環境が大きく変化しつつあり、コミュニティをいかに良好に維持していくかが重要な課題となっています。

石見銀山と町並みの成立

石見銀山は、大永六年（一五二六）博多の商人により本格的に開発されました。その後、新しい精錬方法の導入や、江戸幕府初代奉行人大久保石見守の手腕による産銀量の増加にともない戦国期〜江戸時代初期にかけて大きく繁栄しました。

今に伝わる「大森町」の町並みは、江戸時代に入り石見銀山御料（幕府直轄領）の行政の拠点とするため意識的に整備されたもので、行政・経済の中心としてにぎわいました。

反面、銀の産出量は減少し続け、明治維新以降は銅を中心とする完全な民間経営となりましたが、大正一二年（一九二三）に休山となり四〇〇年の歴史を閉じることになりました。大森町は、以降も地方行政・経済の中心としての機能を果たしましたが、昭和二〇年代以降、各施設は順次大田町などへ移されていきました。

大森町文化財保存会の設立

大森町には町並みのほか、鉾山や信仰、山城など四〇〇年間にわたる遺跡が多数残されていて、文化財を身近に感じながらの暮らし

が続いています。かつては遺跡の文化財指定を住民自らが行うなど、文化財保護に関する意識が高く、昭和三年には大森町文化財保存会が設立されました。保存会は設立当初から全戸加入とし、文化財の清掃、遺跡の学習活動や情報発信、伝統的建造物群保存地区決定の際には活発な議論の場となるなど、さまざまな活動を経て今に続いています。今年は保存地区の選定二〇周年、文化財保存会の設立五〇周年の節目の年に当たります。



文化財の一斉清掃



自治会協議会による町民説明会



城上神社例大祭の御神幸の行列

住民と行政の協働

観光客の増加に伴う住民生活の変化によって、特に交通問題や定住を前提とした空き家の活用策、観光客へのマナーの喚起などの課題が指摘されています。これらは住民生活に密接に関連するため、月一回開催される自治会協議会の場で、行政も加わって「遺跡と自然と人々の暮らしが調和する町の良さを引き継ぐ」ことを念頭に課題解決に取り組んでいます。

受け継がれる行事

大森町には、代官を祀る井戸神社や鉾山の神（金山彦命）を祀る佐比売山神社など、今でも地元の人たちによって受け継がれている神社があります。その行事の中から町の氏神である城上神社の例大祭をご紹介します。神社の由来については定かではありませんが、他所に鎮座されていたものを、永享六年（一四三四）大内氏により大森町の愛宕山に遷祀され、天正五年（一五七七）毛利氏により現社地に再度遷祀され、篤い信仰を集めました。また「大森」という地名は、この境内周

辺に大きな森があったためともいわれており、江戸時代には大森大明神とも呼ばれていました。

例大祭は、かつては代官や町年寄の参加する重要な行事でした。現在も一〇月一日には神輿を中心に組まれた御神幸の行列が、長砂神社までの約一kmをゆくりと往復します。言い伝えでは、城上神社に祀られる大物主命（大國主命）が、国造りや運営について長砂神社に祀られる少彦名命と相談するためといわれています。

子ども神輿も参加するなど、将来の祭りの担い手が歴史と自然に囲まれて育っています。

（大田市総務部石見銀山課 三谷岳史）

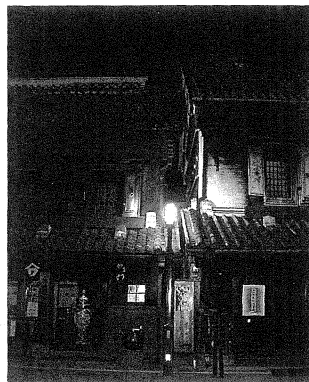


街路灯を視線をさえぎらないポールに建て替え

す。町並みの景観整備をするために、商店街の各店舗の新築や改築、看板を設置する際の諮問機関となつています。メンバーは、商店街の組合員、地元自治会の代表、学識経験者、川越市役所や商工会議所の職員やNPO「川越蔵の会」の設計士です。昭和六三年に「町づくり規範」を制定し、その後この「町づくり規範」に基づきチェックしてきたことにより、一番街商店街では質の高い建築物が建てられ町並みが守られてきました。毎月開かれるこの委員会も今年で二〇周年を迎え、ハーブ面での重要な組織となつていきます。

街路灯

数年前より街路灯の老朽化が進んだため、建て替への話が浮上していました。理事会では、街路灯の建て替へに当たって、今までの積立金の範囲内で行うこと、毎月集めている街路



街路灯の光に浮かび上がる店蔵

灯費は値上げをせず据え置きとすること、会議の議事録はそのつど必ず組合員に回覧し、どのような経緯で決定されたか組合員全員に丁寧に知らせることや、施工業者は、透明性、公平性を図るために三社によるプレゼンテーションを行い決定することを確認しました。

街路灯の建て替えに当たっては、正副理事長、元理事長経験者や組合員からの希望者、アドバイザーとして「川越蔵の会」の四人（設計士、コンサルタント）をメンバーとした街路灯委員会を組織しました。よい街路灯＝高価という考え方ではなく、みんなでアイデアを出し合い、専門家のアドバイザーに耳を傾け、とことん議論をしました。

そして、街路灯委員会と町並み委員会との協議の結果、次の四点を決定しました。①シンプルなデザイン…建物に視線が向くように目立たないシンプルデザインにする。②通り

目指そう全国区

からの視線を優先…通りからの視線をさえぎらないように、ポールを薄くし（三〇㌢、隙間を通りと平行に配置する。③建物のライトアップ…夜間、建物を浮かび上がらせる照明装置とするため、建物側の面だけ透過性のあるアクリル板を使用する。④安全性…フットライトを付けて歩行者の安全性を高める。

実寸の模型を作り、照度や電球の種類を変えて何度も実験を行うことで両委員会のコンセンサスを得ることができ、街路灯委員会を結成させてから一年がかりで、街路灯が無事完成しました。同時期に県道の歩道部分の石畳化が行われ、いっそう蔵の町並みが引き立つ景観となりました。

一番街商店街では、伝統的な建物、歴史的町並みの景観を大切にするとともに、個々の店が今以上に魅力を発揮して、本物志向で大人の観賞に耐えうる商店街として数多くのリピーターを引き寄せたいと考えています。川越の一番街で商いをしていることに誇りをもち「Heart」力強く「Power」をもちまな着想で「Idea」経験を生かし「Experience」名実ともに全国に名を馳せられるように組合員一同努力していきたいと思っております。

(川越一番街商業協同組合理事長 原知之)

埼玉県川越市

川越一番街 街路灯建て替えの取組

蔵のまち川越一番街

川越市は、人口約三万人で、都心に出るのに電車で一時間以内の距離にあります。蔵造りの建物が多く残っている川越一番街



原寸模型による点灯実験

商店街は、東武東上線・JR川越駅より約2km、西武新宿線の本川越駅より約1kmの距離にあります。

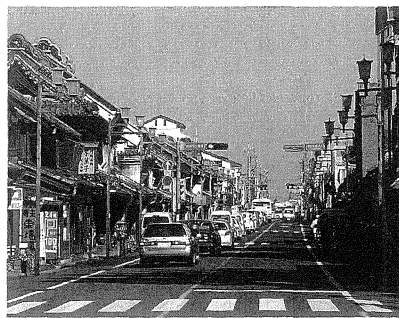
明治二十六年の川越大火後に防火建築として建てられた蔵造りの商家が、一〇〇年以上の年月を経た今でも現役で大勢の観光客を集客しています。平成一一年に重要伝統的建造物群保存地区に選定された蔵造りの町並みは、行政の責任において保存が図られるようになりましたが、保存地区内に位置する川越一番街商店街は、それよりも早く昭和六二年に町並み委員会を組織して自主的に秩序ある景観を保ってきました。このように、一番街商店街は、まちづくりにおいて先駆的な活動を実践し、昨年六月、まちづくりや商店街の活動が認められ、経済産業省の「がんばる商店街七選」に選定されました。光栄なことに、本年三月二十八日には天皇皇后陛下とスウェーデン国王夫妻がご来訪になり、一番街の町並みを楽しんでいたことができました。

町並み委員会

商店街の組織に「町並み委員会」がありま

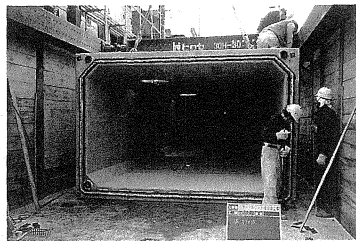


街路灯建て替え前（左）と後

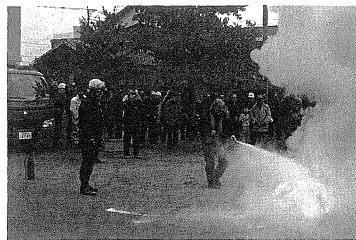




若宮おくちの毛槍行列



火災に備え、100tの防火水槽を設置



町ぐるみで消火器訓練



平成18年度に竣工した防災施設附属棟

今後は自主防災組織としての体制づくりを推進し、住民の自治意識をさらに育成していききたいと考えています。

保存地区内の高齢化や空き家などの課題を抱えながら、消火活動を住民の手で行うため、地元保存会「吉井の町並をよくなる会」では文化財防火デーに毎年、初期消火の訓練を行いながら、町並みを火災から守る活動も行っています。防災設備が整備されるまでは消火器による消火訓練でしたが、現在では関係機関と連携した訓練を実施しています。

保存地区を守る住民

保存地区内の高齢化や空き家などの課題を抱えながら、消火活動を住民の手で行うため、地元保存会「吉井の町並をよくなる会」では文化財防火デーに毎年、初期消火の訓練を行いながら、町並みを火災から守る活動も行っています。防災設備が整備されるまでは消火器による消火訓練でしたが、現在では関係機関と連携した訓練を実施しています。

災害計画を策定しました。調査期間中の平成一五年二月に、伝建地区内で火災が発生し住宅が一棟全焼しました。この火災で水利や初期消火、組織の問題など多くの課題が浮き彫りとなり、住民から早急に防災事業の実施を求める声が出されました。それを受けて、平成

一六年度より防災事業に着手し、昨年度末で初期消火用（住民用）と本格消火用（消防署用）のための一〇〇tの防火水槽とそれに伴う附属棟（ポンプ室・便所・避難室）など、防災施設四か所の整備が完了したところです。今後、防災計画に基づき整備を行っていき

終わりに

近年、全国的に地震・台風によって、伝統的な家屋が倒壊する等、多くの被害が出ています。うきは市でも平成一七年三月二〇日に発生した福岡県西方沖地震により塀や壁の被害がありました。また、毎年、台風によって屋根瓦が飛ぶ等の被害が出ています。

先日は、新潟県中越沖地震のニュースが飛び込んできました。倒壊した家屋によって多くの高齢者が犠牲となり、あらためて地震等の自然災害に対する対策をしなくてはならないと考えています。

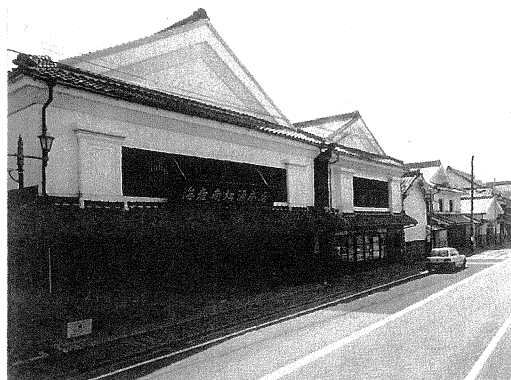
その予防対策として景観整備はもとよりですが、災害時のライフラインの強化として伝建地区内の国道二一〇号の電線の地中化事業が本年度より着工しました。また、家屋については耐震補強だけではなく、蟻害の予防事業を地区ごとに実施していきたいと考えています。

伝統的建造物群保存地区を住み続けながら文化財として守っていくことは、地域住民の方とともに行政として早目の対策を講じていくことが肝要であると思います。今後とも、さらに災害に対して強い町づくりを行っていき

防災に強い町づくりを目指して

白壁土蔵の町並みのおこり

うきは市筑後吉井伝統的建造物群保存地区は、福岡県の南東部の筑後川中流域に位置し



耐火性に優れた白壁土蔵が並ぶ筑後吉井の町並み

ています。慶長七年（一六〇二）に町建てが行われ、江戸時代を通じて城下町久留米と天領日田を結ぶ豊後街道の宿駅として機能しました。江戸時代中期以降には商品作物の栽培・加工およびその集散や「吉井銀」と称された有力商人の金融活動で繁栄しました。

保存地区は、豊後街道（現国道二一〇号）沿いの重厚な塗屋造町家が連続する町並みと災除木川沿いに広がる屋敷群から構成されています。明治二年（一八六九）五月の大火を契機に、草葺きから瓦葺き塗屋造の町家に変貌し、経済の最盛期であった大正時代に現在見るような町並みとなりました。まさに、耐火性の優れた白壁土蔵の町並みは、火災から生命や財産を守るための知恵であり、先人のすばらしい遺産といえるでしょう。

歴史的町並みの保存活用

このように、先人たちの生活と財産を守った伝統的な町並みを保存し、地域の活性化に



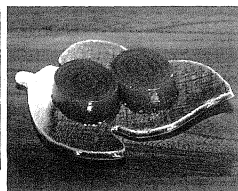
防災施設を利用して消火訓練

防災事業の動き

平成一四年度より二か年で調査を行い、防



勤兵衛茶屋へようこそ（熊川宿おもてなしの会）



勤兵衛茶屋白慢の葛ようかん

題し、地元の主婦が運営している愛媛県内子町の石畳の宿を訪ねました。そして、研修に参加したメンバーが中心となり、今年三月、自立したまちづくり型経済活動と来訪者との交流を目指す「熊川宿おもてなしの会」が設立されることになったのです。会員は一万円の出資を条件として募集したところ二六人が集まりました。現在、日曜日と祝日に限

り、旧逸見家の土間部分を喫茶スペースとして利用し、特産の葛を使った葛ようかんを看板メニューとして「勤兵衛茶屋」を営業しています。勤兵衛茶屋のコンセプトは「和風・手作り・おもてなしの心」。お店の雰囲気や接客の在り方などにも会員のこだわりがあります。葛ようかんは、京都からUターンされた元和菓子職人であった方の発案による一品です。会員が当番で、調理、接客に当たり、来訪者との交流も進み、好評をいただいています。勤兵衛茶屋には、自信と誇りをもって活動している住民の姿があるのです。

次に鯖街道交流シンポジウムの開催です。熊川宿は、鯖街道の宿場町として発展してきました。そして今も変わらず鯖街道あつての熊川宿です。そこで、今後も鯖街道の各地域との交流をさらに進めていくことが重要であるとして、八月二十六日、「鯖街道」をテーマに活動している団体が集まってシンポジウムを開催することになりました。集まったのは、鯖街道の始点である小浜、滋賀県の保坂、朽木、京都市の一乗寺、鯖街道の終点である出町、そして地元熊川の計六団体。パネルディスカッションでは、京都府立大学の宗田好史先生の司会により六団体の代表の方がそれぞれの地域資源や活動を発表し、どのように各地の活動を結びつけていくかについて話し合いました。その後、街道に櫓を組み、「鯖街道総踊り」と



鯖街道交流シンポジウム

して「朽木音頭」や「てっせん踊り」に参加者全員で踊り交流を深めました。これからも、多くの住民が自分の特技や能力を生かしながら活動に参加し、誇りと生きがいをもって暮らし続けられる、そんな熊川宿のまちづくりのお手伝いができればと思っています。

（若狭町文化財室主事 岡本潔和）



鯖街道総踊り

福井県三方上中郡若狭町

選定から一〇年 熊川宿の新たな取組

鯖街道の宿場町

若狭町は、福井県の南西部、嶺南地方のはば中央部に位置する人口一万七〇〇〇人の町です。町内には熊川宿、縄文時代の鳥浜貝塚、若狭の首長墓といわれる国史跡の古墳群、ラムサール条約にも登録された名勝三方五湖、名水百選の瓜割の滝などがあり、数多くの歴史遺産と自然遺産に恵まれた町です。平成八年に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された熊川宿は、滋賀県の県境に位置する人口三〇〇〇人の小さな集落で、かつては若狭小浜と京都を結ぶ若狭街道（鯖街道）の宿場町として繁栄してきました。街道には平入り、妻入りの建物が混在しながら連続性をもった町並みが形成され、前川と呼ば



勢いよく流れる前川

暮らし続けるためのまちづくり

熊川宿では、昭和五〇年代から活発なまちづくり活動が行われてきました。平成七年に「若狭熊川宿まちづくり特別委員会」が発足すると、その会を中心に、活動が大きく進展しました。河合健一会長は、歴史や町並みを生かしながら、ここに住民が暮らし続けるためのまちづくりを行っていくことを目標に掲げました。伝建選定後の一〇年間は、この目標を見据えながら着実に事業を展開させてきました。美化活動、広報誌の発行、工芸品の開発、語り部の養成、まちづくりフォーラムの開催などその活動は多彩です。平成一〇年には、京都から伝わった「てっせん踊り」を八〇年ぶりに復活させ「熊川宿伝統芸能保存会」が発足しました。平成一四年には、白石神社の山車と見送り幕を四〇年ぶりに復元させました。また、伝建による修理事業が始まると技術者が

集まり「熊川宿並み保存伝統技術研究会」が発足しました。平成一二年から始まった秋の観光イベント「熊川いっぶく時代村」は、若狭を中心とした実行委員会が盛り上げています。

新たな取組

熊川にとって、平成一八年は、選定一〇年という記念すべき年であるとともに、節目の年でもありました。この一〇年の間、電線の地中化、民家の修理などで景観は大きく変わりました。道の駅ができてからは観光客が大幅に増えました。その反面、少子高齢化は進み、空き家が増加しました。この変化は住民の生活環境に大きな影響を与えています。そこでこれらの課題に対応するため、約一年の議論を経て、熊川区は「第二次熊川まちづくりマスタープラン」を策定し、今後のまちづくりの方針と具体的方策を定めました。

プランの策定から九か月が経ちましたが、既にプランに基づく取組が始まっています。まず、旧逸見勤兵衛家を活用した住民によるおもてなし事業です。熊川の来訪者は年々増え、いっぶくできる場所や来訪者と住民が交流できる場所がないという感想が聞かれるようになりました。そんななか、マスタープランの会議の席上、自分たちの手でいっぶく処をつくりたいという意見が出されました。さっそく、全区民から参加者を募り、「おもてなし研修」と



風の通り馬場

保存地区に残る伝統芸能

保存地区には、疱瘡踊（昭和三八年鹿児島

体の問題として勉強会を実施しました。また、地区の景観に重要な生垣を枯らしてしまう害虫が発生すれば、会費として徴収した運営資金で薬剤を購入し、薬剤散布を実施しています。その他、地区内の馬場（通り）の愛称を募集して「風の通り馬場（かぜんとおいば）」と名付けて標柱を設置するなど、保存会が主体となった活動に行政等を取り込んで活動するスタイルを確立させています。

県指定」という郷土芸能も傳承されています。この踊りは、女性だけで踊られ、黒紋付の盛装に手拭を被り、太鼓打ち、帯を派手な蝶結びにして赤い櫻を掛け陣笠を被ります。疱瘡は、流行すると困る病気であるため、発生しないであほしいと願うのが一般的ですが、「疱瘡の神様来てくださってありがとうございます。踊りをお見せしますので、見終わったら次の場所へ立ち去ってください」という趣旨で踊られています。記録では、寛政二年（一七九〇）の天然痘流行時から踊られ、現在では、祭事や県内のイベントで踊られることがほとんどになっています。男性上位といわれている鹿児島県において、女性が表舞台に立つて踊り、男性は世話役として支える形態は非常に珍しく思われますが、戦時に表舞台で活躍する男性が疱瘡の病にからぬように、女性が疱瘡の神様に接して犠牲になっていったと考えれば、古くから相互に支え合い地区を守っていくというスタイルの確立をこの踊りから想像することもできるのではないのでしょうか。

入来文書ゆかりの地として守られることに



疱瘡踊の練習風景

なつた保存地区は現在、徐々にではありますが、その起源となる史跡清色城跡と関連性のある保存整備が進められています。往時をいつまでもうかがいしめることのできる地区として、保存会を主役とさまざまなチカラと一体となつて守っていくことができればと思っています。

（薩摩川内市教育委員会教育部文化財課 文化財グループ 堀之内寛郎）

鹿児島県薩摩川内市

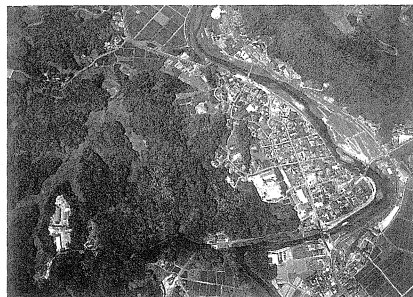
入来麓を守る

薩摩川内市は、鹿児島県北西部に位置し平成一六一年に一市四町四村の市町村合併によって誕生しました。

保存地区は、市内のほぼ中央部に位置し、平成一五年一二月に重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。

中世山城である史跡清色城跡（平成一六年九月国指定）を背

に、ほぼ同時期に成立したと思われる麓集落を基盤として、近世に整備された玉石垣群による街路構成と地割りがよく残されており、これらの玉石垣群と生垣に囲まれた緑化環境の中で整然としたたたずまいに武家



清色城跡と入来麓



伝建地区を案内する保存会

入来文書ゆかりの地

保存地区の区割り等が今日まで大きく変更されることなく残されてきた要因に入来文書の存在が挙げられます。

入来文書は、宝治元年（一二四七）に相模

国（現在の神奈川県）から下向してきた渋谷氏を起源に、明治維新までの約六二〇余年間の入来院氏の動向が記され、日本中世史の解明に最も重要視されてきました。地区の中心を南北にはしり、現在は、市道となっている道路幅の問題が発生したとき、この「入来文書」とともに保存されてきた麓集落を守ろうと、全国の研究者たちによる署名活動が起こり、本地区は、今日まで保存されることとなりました。現在では、東京大学史料編纂所所有となっていますが、この「入来文書」の存在が清色城跡の国指定と麓集落の重要伝統的建造物群保存地区選定に大きく寄与しています。

伝建制度の主役「保存会」

重要伝統的建造物群保存地区に選定されてからこの一二月で四年になります。と同時に、地区を支える保存会も結成四年目を迎えます。現在、保存会の存在なくしては、伝建制度の円滑な運用ができないといえるほど、大きな存在となり、地元と行政とが協働したまちづくりが実施されています。

とにかく、やる気のある保存会。できるだけ行政に頼らず情報収集を行い、民間財団等からの補助を受け、活動の幅を年々広げています。昨年は、地元建築士会と協働で住宅耐震に関するワークショップを開催し、地区全



三町伝統的建造物群保存地区・上二之町の雪またじ



火伏せの神・秋葉さまの小祠は地区内各所に見られる

屋台をもつ屋台組だけでなく、文政年間に屋台が創建され、明治初年の大火で灰燼に帰した八幡祭の船鉾台組のように、現在屋台はもたないものの、屋台組の組織は受け継がれている屋台組もあり、祭礼には代車で行列に参加したりして、高山の祭りを支えています。また町屋の密集していた地区では、火災の恐れが大きく、古くから火伏せの神である秋葉神への信仰が強かったため、今でも伝建地区内のあるところどころには秋葉さまの祠が祀られています。

ソフト面での町並み保存

高山の町並みが現在も守り続けられているのは、そこに住む人々の暮らしあってこそなのです。高山の町並みは国選定の伝建地区とし



町並みを見守る下町連絡会・船鉾台組町並保存会会長・川上幸夫さん

高山の町並みが現在も守り続けられているのは、そこに住む人々の暮らしあってこそなのです。高山の町並みは国選定の伝建地区とし

ソフト面での町並み保存

高山の町並みが現在も守り続けられているのは、そこに住む人々の暮らしあってこそなのです。高山の町並みは国選定の伝建地区とし



三町伝統的建造物群保存地区では今も季節の野菜を売り歩く

て、修理事業なども進められており、今年度からは下二之町大新町地区の無電柱化のための整備工事を実施されていますが、ハードとしての町並みだけではなく、そこに息づく暮らしの文化の保存も重要です。

近年では、伝建地区内での住民の高齢化や空家の増加などの問題もみられますが、地元保存会の活動など地域の人々の協力により、今後も上質の暮らしの文化を守りつたていくことが望まれます。

(高山市教育委員会文化財課グループリーダー 奥原徳浩)

岐阜県高山市

飛騨高山の町並みの暮らし

一六世紀から守られてきた町並み

飛騨高山の伝統的な町並みは、飛騨を治めることとなった戦国時代の武将、金森長近(一五二四―一六〇八)およびその後歴代の金森氏の時代に城下町の基本的な町割が定められたものです。高山城を取り囲んで武家屋敷群が配置され、一段低いところに三筋の通りを設けて商人町が置かれました。この商人の町並みは、元禄年間以降の幕府直轄地時代に受け継がれ、明治大正、そして現代へと守られ、高山市三町および高山市下二之町大新町の二地区が、国の重要伝統的建造物群保存地区の選定を受けています。

直轄地時代には、郡代や役人が江戸から赴任していましたが、地元の産業は大坂や京都などとの商取引も多く、江戸の文化と京の文化それぞれの影響を受けて、独自の上質な文化が育まれてきました。それらの文化を受け入れる素地が、既に金森氏の時代にかたちづく



三町伝統的建造物群保存地区内にある造り酒屋

られていたわけ
です。

高山出身の作家福田夕映は、『山都年中行事』の中で「正月」「初午」「春秋の祭」「とし取り」など、昭和初期

の高山の人々の暮らしを記していますが、この中に見られる年中行事など四季折々の暮らしの文化は、江戸時代から続くものも多く、現在でも伝建地区内の人々の暮らしの中に息づいています。

高山の伝建地区は、江戸時代からの商人の町であつたもので、現在でも商店が多く、造り酒屋、畳屋、和菓子屋、表具屋などもあり、地域の人々が日常的に利用している町並みでもあります。その中で季節ごとの行事が守られているのです。

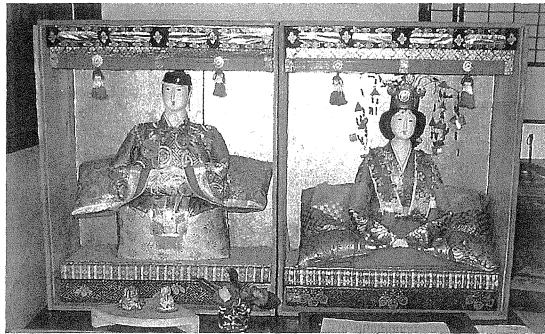
暮らしの中に息づく伝統行事

一年の行事の中でも、特に町並みとのかわりが深いのは、毎年春の日枝神社の例祭(春の高山祭)と、秋の桜山八幡宮の例祭(秋の高山祭)です。

現在の伝建地区内の保存会の名称を見てみると「恵比須台組町並保存会」「鳩峰車組町並保存会」など、屋台組の名を冠した名称が多く、祭屋台の伝統的な保存運営組織である屋台組のつながりが、現在の町並保存会の母体となった経緯を物語っています。



三町伝統的建造物群保存地区・上三之町を曳かれる祭屋台



昭和30年代の箱雛

箱雛は、昭和三〇年代まで作られていたが、昭和四〇年代になると七段飾りが主流となり、作られなくなりました。

現在は市内に九州一の雛人形の生産量を誇る会社「八女人形会館」があります。近年、町並みの住民などからの提案を受け、この企業により「平成の箱雛」が復原されました。現代の雛人形が、桐の箱に入っています。飾りつけや出し入れが簡単で、収納も場所を取りません。ぜひ一組お求めになってはいかがでしょうか。

「ぼんぼりまつり」の実行委員会は、市の観光課が事務局となり、町並みのまちづくり団体のほか、商店街や観光協会、婦人会等の人たちによって構成されています。

期間中は、沿道に桃の花や菜の花などを竹筒に飾り、市内の園児たちがお雛様・お内裏様の格好で町並みを行列する「お雛様パレード」、着物を着て町並みを歩いてもらう「和服でめぐる八女のまち」、十二単衣と束帯姿というお雛様

さまざまなイベント

「ぼんぼりまつり」の実行委員会は、市の観光課が事務局となり、町並みのまちづくり団体のほか、商店街や観光協会、婦人会等の人たちによって構成されています。

期間中は、沿道に桃の花や菜の花などを竹筒に飾り、市内の園児たちがお雛様・お内裏様の格好で町並みを行列する「お雛様パレード」、着物を着て町並みを歩いてもらう「和服でめぐる八女のまち」、十二単衣と束帯姿というお雛様

最初は予算もつかず手探りでしたが、町並みの旧家の一軒一軒をたずね、昔の「箱雛」を土蔵の奥から出す手伝いをして、表に展示してもらいました。

このことが町の方々にとっても、足元の文化を見直すきっかけになったようです。一か月間自宅を公開することはたいへんな負担だと思いましたが、お客様に八女の文化を見てもらいたいと思っていただき、町のにぎわいに貢献したいという思いで公開されています。

町の人々の思い

八女福島地区での雛祭りのイベントは、大分県日田市の豆田地区との交流の中で、雛人形の生産地である八女でもぜひ町並みでの雛まつりをとという勧めで、平成一〇年三月から始まりました。

最初は予算もつかず手探りでしたが、町並みの旧家の一軒一軒をたずね、昔の「箱雛」を土蔵の奥から出す手伝いをして、表に展示してもらいました。

訪れるお客さんは、各地の雛祭りを回るバスツアーの方が多く、観光協会のボランティアガイドが案内します。人手が足りず、市の商工観光課職員が急きょ助っ人することもある。ツアラーのほうには滞在時間が短く慌ただしいのが残念ですが、最後に「今日は時間が足りなくて町並みの三分の一もご案内できませんでした。次はゆっくりご家族・お友達と遊びにきてください」と再訪をお願いしています。「また来たい」と思ってもらえるような魅力を伝える案内を心がけています。

最近、町家を生かした雰囲気の良い食事処やカフェが少しずつ増えてきました。町並み案内のガイドも希望者が増え、おもてなしの勉強中です。古い町並みを訪れた方には、ゆっくり過ごして、いろんな魅力を深く味わってほしいと思います。

(八女市商工観光課 高口 愛)

町並み案内

訪れるお客さんは、各地の雛祭りを回るバスツアーの方が多く、観光協会のボランティアガイドが案内します。人手が足りず、市の商工観光課職員が急きょ助っ人することもある。ツアラーのほうには滞在時間が短く慌ただしいのが残念ですが、最後に「今日は時間が足りなくて町並みの三分の一もご案内できませんでした。次はゆっくりご家族・お友達と遊びにきてください」と再訪をお願いしています。「また来たい」と思ってもらえるような魅力を伝える案内を心がけています。



お雛様の衣装で結婚式後人力車でパレード

福岡県八女市

八女生まれのお雛様を訪ねて 「雛の里・八女ぼんぼりまつり」

八女福島地区の概要

八女福島地区は江戸時代から続く商家町で、伝統工芸の仏壇・提灯の工房・店舗も多く、八女市の中心市街地に位置します。



八女福島の町並み

平成三年ごろから地元の町並み保存の取組が始まり、平成七年から国土交通省の事業を活用して町家の修理補助を始め、町並みを八女市の重要な文化・観光資源として保存整備を進めています。重要伝統的建造物群保存地区には平成一四年に選定されました。

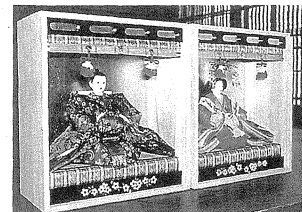
まちじゅうで雛祭り

三月の一月間、伝統的町並みと商店街で「雛の里・八女ぼんぼりまつり」が開催され、各戸・商店の軒先・店先約一〇〇か所に八女の郷土雛「箱雛」をはじめとするお雛様が飾られます。軒先にピンクの提灯が下がっているところがお雛様を飾っている目印で、すべて入場無料。来訪者はお雛様を訪問しながら、ゆっくり歩いて町の中をめぐる。

ふだんは一般の住宅で外からしか見えない町家も、このときは中まで入ることができ、太くて黒光りする立派な梁・柱や、美しいお座敷や中庭を見ることがができます。

雛の里 雛人形の生産地

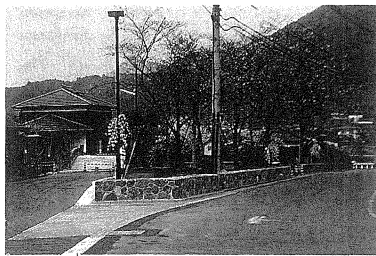
「箱雛」は、八女地方独特の飾り方をするお雛様で、男雛と女雛がそれぞれ杉の箱に入っています。箱の前面に蓋をすることができるようになっており、この蓋を開けると簡単に収納できます。江戸後期から八女福島地区の提灯・仏壇の職人により本職の合間に作られ始め、大正期には提灯屋が商品として生産するようになりしました。女雛の宝冠や御簾の飾りには提灯の止め具、衣装は仏具に数多く金網が使われ、台座には提灯の枠と同じ蒔絵風の絵が描かれています。



平成の箱雛



地区内の提灯屋



修景石積み



佐野至氏制作の版画



目鏡橋の石畳

今回の整備は、秋月地区目鏡橋周辺整備検討委員会をはじめとする多くの方のご協力が無事竣工しました。地元の方々は「自分たちの意見が工事に反映され、目鏡橋および公園に愛着がもてるようになった。自分たちの公園としていつまでも美しく使っていきたい」と言っています。また、平成一九年三月三〇日地元秋月振興会主催（約一〇〇名出席）で二〇〇年ぶりの渡り初めが盛大に行われ地元の歴史遺産の一つに光が当てられました。

これからも地域の人々が愛着や誇りをもてるような整備を心がけたいと思います。

（朝倉市都市計画部都市計画課 井本雅晶）

④官民共働事業
当時藩の財政は火の車であり、工事費八〇貫目中、三〇貫目は大庄屋平田治部右衛門が出銀し、官民共働で行われていました。

整備方針および整備工事
整備に当たっては、地元において目鏡橋整備検討委員会を立ち上げ、地元コミュニティの活性化および整備調整を図るため延べ四回の会議を行いました。専門的見地からは、朝倉市歴史的景観審議会、県文化財保護課のアドバイザーを得ながら進めました。

①整備方針策定
整備方針策定に当たっては、現況調査および藩政期の古地図が現存するため、これらを参考に基本設計をし、発掘調査の成果を基に

実施設計を行いました。

- ・橋については表面を覆うアスファルトを剥ぎ、石畳を露出させる。
- ・道路については、橋の両岸は石橋が作られた時期の高さに戻す。また、東側公園は番所（福岡口）があったところであり城下町特有の枳形を有するため路面表示する。
- ③整備工事
- (1)橋工事
石畳を覆うアスファルトを除去し石畳を復原しました。約八割の石に不陸および風化が見られたため修理を行いました。可能な限りオリジナルな部分（二割）を残し石材ごとに修理方針を検討し、風化の激しい材は入れ替え、割れたものは接着剤や金具で接合しました。橋の内部構造は、下層部は栗石、上層部

は土で表面石畳の高さ調整がなされていたため同様の工法で修理しました。

(2)道路工事
藩政期の枳形がイメージできるような路面表示し、路面高道路幅員を復原しました。工事中江戸期と思われる水路が出土したため、いったん工事を中止して発掘調査を行い、その結果を踏まえ、石積水路をモニユメントとして生かす整備を行いました。

(3)その他
ガードレールについては石積みで修景し、史跡説明板は有田焼陶板としています（昭和五四年より使用）。

最後に
今回の整備は、秋月地区目鏡橋周辺整備検討委員会をはじめとする多くの方のご協力が無事竣工しました。地元の方々は「自分たちの意見が工事に反映され、目鏡橋および公園に愛着がもてるようになった。自分たちの公園としていつまでも美しく使っていきたい」と言っています。また、平成一九年三月三〇日地元秋月振興会主催（約一〇〇名出席）で二〇〇年ぶりの渡り初めが盛大に行われ地元の歴史遺産の一つに光が当てられました。

これからも地域の人々が愛着や誇りをもてるような整備を心がけたいと思います。

（朝倉市都市計画部都市計画課 井本雅晶）

二〇〇〇年ぶりの渡り初め 目鏡橋および周辺整備事業の現場から

このたび、朝倉市合併一周年に際し、秋月伝統的建造物群保存地区内に架かる県指定有形文化財目鏡橋および目鏡橋周辺の整備工事を行いました。一連の作業工程および地元住民のかかわり等を紹介します。

目鏡橋物語（白翁老随筆より）

江戸時代秋月城下の西の玄関口であり、秋



秋月振興会主催の渡り初め

月街道沿いに架かる木橋（本寿院橋）は、往来が多く生活にはなくてはならない存在でしたが、洪水のたびに流失し、そのつど藩では橋の架替えに手をやいていました。そのころ、秋月藩は長崎警備の代藩を命ぜられ、長崎へ赴く者が多く、それらの人々は中島川に架かる石橋を目にとめてあんな橋が秋月にも、と思われない者はいませんでした。これに裁断を下したのは主席家老の宮崎織部舒安でした。かくて長崎の石工に頼み工事は着々と進められ、完成までに数年を要し、一度は竣工間際に崩壊するという事態もありましたが、さらに慎重を期し再度着工、みごと完成しました。かくて一八一〇年一月三日九代藩主黒田長昭公も出席し渡り初めが行われました。

秋月目鏡橋の特徴

①秋月周辺で採れる硬い白御影石を使用
江戸期の御影石造りの眼鏡橋は他に例がありません。

②優れた意匠

護岸高が低く川幅は広いのですが、川の流れが速いため一径間とし、径間が護岸高の三・六倍にもなる扁平形となっています。また、橋詰には段差が各二段ありますが車力等も通れるよう低い段差（約七cm）となっており、河床の石畳や周囲の自然と相まってみごとな景観となっています。

③強固な護岸

眼鏡橋を設ける場合護岸がしっかりしている必要があります。これは、上からの重力を真下ではなく横、つまり護岸で支える構造になっているためです。そこで護岸には城の石垣でも使用されている強固な算木積みが施されています。



桜の目鏡橋